

間尽遺跡調査報告

— 平成10年度、手洗野（2）地区急傾斜地崩壊対策事業に伴う調査 —

2000年3月

高岡市教育委員会



1. 遠景（北東）



2. 調査風景（南東）

序

「間尽遺跡」は、高岡市北西部、西山丘陵の麓の手洗野地区に位置します。西山丘陵は、縄文時代前期から當々と人々が生活を営んできました。丘陵の尾根上には古墳、寺院、城跡など時代を象徴するものが築かれています。一方、麓には古代北陸道や小矢部川が走り、陸上・水上交通の要所としても位置づけられます。

手洗野地区は、古代の射水郡と砺波郡との境ということもあり、古くから開けています。弥生時代の終末期に築造された倉谷古墳群、富山県内で3番目に大きい円墳がある四十九古墳群や安層山古墳群といった数々の古墳があります。また、東大寺領須加庄もこの付近に比定されており、「間尽遺跡」においても古代の真が確認されています。中世になると越中で最初の禅寺である曹洞宗国上山信光寺が造営されます。また、地元の伝承として、四十九坊や二上山養老寺の仁王門があったとされています。手洗野地区はこうした歴史の深い地区と認識できます。

この度、急傾斜地崩壊対策事業の実施に伴い、「間尽遺跡」の発掘調査を実施することになりました。調査の結果、山間に平坦面の造成や溝の構築など人為的な土木工事を実施していることが解りました。

最後になりましたが、現地調査および移作業にご協力頂きました、関係各位、地元のみなさまに厚く感謝いたします。

平成12年3月

高岡市教育委員会

教育長 細呂木 六良

例 言

1. 本書は、手洗野（2）地区急傾斜地崩壊対策事業に伴う、岡尾遺跡発掘調査の報告書である。
2. 現地調査は、富山県高岡市土木事務所の委託を受けて、高岡市教育委員会文化財課が実施した。
3. 調査地区は、高岡市手洗野字平田である。
4. 発掘調査（現地調査）は、平成10年4月2日～同年7月10日までである。
5. 報告書作成作業は、平成11年度事業として実施した。
6. 調査関係者は次の通りである。
　文化財課長：宮村朋博
　課長補佐：大石一茂
〔遺産文化財担当〕
　石浦正雄（主任）
　山口辰一（主任）
　塙津明義（文化財保護主事）
　荒井 隆（文化財保護主事）
　太田浩司（文化財保護主事）
7. 当調査は、山口・荒井が担当者として実施した。現地調査においては、藤原勝美（山武考古学研究所調査研究員）、日沖順史（山武考古学研究所調査研究員）、岡田一弘（富山大学学生）が補佐・協力した。資料整理・報告書作成については、岡田が作業実務を担当した。
8. 本書における遺構記号は、次の通りである。
　S A～横丸、S D～溝、S K～上坑、S X～平坦面・凹地
9. 本書における上層は次の通りである。溝 S D03は断面図から確認したものであり、他のものと区別するためにアルファベットで表示した。
　1～31：表土・包含層、41～56：中世基盤層、101～104：土坑、111：溝、
　121～145：平坦面・凹地、a～k：溝 S D03
10. 本書における遺物番号は、次の通りである。
　1001～1138：土器類、2901～2037：土製品、3001～3003：鉄製品、4001～4005：副葬品
11. 現地調査及び報告書作成において、以下の各氏より御教示、御援助を得た。
　宇野隆夫、岡本淳一郎、久々忠義、小島俊彦、西井龍儀、宮田進一、山本正敬
　（五十音順、敬称略）
12. 本書の執筆は、岡田が担当し、山口・荒井が加除・修正した。

高岡市埋蔵文化財調査報告第5回
間尽遺跡調査報告

目 次

巻首圖版

序

例 文

目 次

第1章 序 説	1
第1節 遺跡概観	1
第2節 調査概観	7
第2章 遺 構	11
第1節 平坦面	11
第2節 その他の遺構	12
第3章 遺 物	15
第1節 土器類	15
第2節 その他の遺物	20
第4章 結 語	21

図面目次

- 図面1 遺構実測図 1. 上層遺構平面図 (1/200)
2. 下層遺構平面図 (1/200)
- 図面2 遺構実測図 西側調査地X十層断面図 (1/60)
- 図面3 遺構実測図 東側・中央調査地X土層断面図 (1/60)
- 図面4 遺構実測図 中央調査地X北壁上層断面図 (1/60)
- 図面5 遺構実測図 清S D03復元図 (1/80)
- 図面6 遺構実測図 1. 中央調査地X遺構図 (1/200)
2. 土師土状施作図 (1/40)
3. 凹地S X02実測図 (1/80)
- 図面7 遺物実測図 小器類 (1/3)
- 図面8 遺物実測図 大器類 (1/3)
- 図面9 遺物実測図 土器類 (1/3)
- 図面10 遺物実測図 土器類 (1/3)
- 図面11 遺物実測図 土器類 (1/3)
- 図面12 遺物実測図 土器類 (1/3)
- 図面13 遺物実測図 土製品 (1/2)
- 図面14 遺物実測図 土製品 (1/2)
- 図面15 遺物実測図 土製品 (1/2)
- 図面16 遺物実測図 鉄製品他 (1/2)

図版目次

- 図版1 遺跡 1. 遺長 (東)
2. 遺景 (東)
- 図版2 遺跡 1. 調査地区全景 (東)
2. 調査地区全景 (東)
- 図版3 遺跡 1. 調査地区全景 (東)
2. 調査地区全景 (西)
- 図版4 遺跡 1. 西側調査地区全景 (南)
2. 西側調査地区全景 (南東)
- 図版5 遺構 1. 凹地S X02 (上方)
2. 凹地S X02 (北)
- 図版6 遺構 1. 横幅S A01全景 (南)
2. 平坦面S X01全景 (西)

- 図版 7 遺構 1. 平坦面 S X01断面 (南東)
2. 凹地 S X02断面 (西)
- 図版 8 遺構 1. 壤 S D03断面 (東)
2. 壽 S D03断面 (東)
- 図版 9 遺構 1. 壽 S D03断面 (東)
2. 壽 S D03断面 (東)
- 図版 10 遺構 1. 平坦面 S X01遺物出土状態、土師器皿 (東)
2. 平坦面 S X01遺物出土状態、土師器皿 (南)
3. 凹地 S X02遺物出土状態、土瓶 (南北)
- 図版 11 遺構 1. 平坦面 S X01遺物出土状態、鉄釘・銅釘 (南)
2. 平坦面 S X01遺物出土状態、鉄釘・銅釘 (南)
3. 凹地 S X04遺物出土状態、銅錢 (西)
- 図版 12 遺跡 1. 調査風景 (東)
2. 調査風景 (南西)
3. 調査風景 (北)
- 図版 13 遺物 1. 土師器 (古代)
2. 土師器 (古代)
- 図版 14 遺物 1. 土師器 (古代)
2. 須恵器
- 図版 15 遺物 1. 土師器 (中世)
2. 土師器 (中世)
- 図版 16 遺物 1. 土師器 (中世)
2. 瓦質土器
- 図版 17 遺物 1. 土師質土器
2. 土師質土器
- 図版 18 遺物 1. 瓦片
2. 陶片・中世鐵器系陶器・中世青磁器
- 図版 19 遺物 1. 近世青磁器
2. 製塙土器
- 図版 20 遺物 1. 土鍬
2. 土鍬
- 図版 21 遺物 1. 土鍬
2. 土鍬
- 図版 22 遺物 1. 銅の羽口
2. 鉄釘
3. 銅釘
4. 銅錢

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図(1/15万)	2
第2図 遺跡位置図(1/5万)	3
第3図 遺跡地図(1/1万5千)	4
第4図 遺跡地図(2)(1/1万5千)	5
第5図 1町区域位置図(1/7,500)	7
第6図 集落地区位置図(1/5,000)	8
第7図 平坦面S X01位置図(1/300)	11
第8図 古代遺物の出土散布図(1/300)	22
第9図 中世遺物の出土散布図(1/300)	22
第10図 古代土器・陶磁器の種類別構成比率	23
第11図 中世土器・陶磁器の種類別構成比率	23
第12図 中世土器・陶磁器の用途別構成比率	23
第13図 中世土器・陶磁器の用途別構成比率	23

挿 表 目 次

第1表 上層一覧表	14
第2表 上層計測表	20
第3表 古代遺物の種類器種別組成表	24
第4表 古代遺物の用途種類別組成表	24
第5表 中世遺物の種類器種別組成表	24
第6表 中世遺物の用途種類別組成表	24

第1章 序 説

第1節 遺跡概観

1. 環境

手洗野

西山丘陵より発して開析谷をなし、小矢部川へ流れ込んでいる河川に頃川川と広谷川がある。この2つの川が形成する開析谷に挟まれた尾根の裾部に間尽遺跡が所在する手洗野集落が位置する。古代礪波郡と射水郡との境界は、この付近に推定されている。古代の北陸道は、小矢部市桜町付近から西山丘陵沿いに北上し、手洗野付近を通って、二上山南麓へ至る。そして、二上地区で小矢部川を渡るか、あるいは越中国に達するとされている。近世に入ると山根道と水見往来が通り、古くから交通の要衝として位置してきた。さらに越中最古の曹洞宗寺院である国上山信光寺が手洗野に造営され、また『越中史徵』によると高岡市二上の所住する真言宗寺院である二上山養老寺の仁王門があったとされる。

集落は、小矢部から伏木へ西山丘陵沿いに走る道（現県道小矢部伏木港線）と、仏生寺を通って水見市街地に抜ける道（現県道高岡水見線）との交差するところにあたる。

手洗野地区は江戸時代～明治22年までは手洗野村であり、その後は西礪波郡国吉村に所属した。昭和26年に国吉村が高岡市と合併することに伴い、高岡市の大字となり、現在に至っている。北側すなわち頭川川の開析谷側は頃川（旧頃川村）、東側すなわち平野側は岩坪（旧岩坪村）、南側すなわち広谷川の開析谷側は月野谷（旧月野谷村）である。

国上山信光寺

国上山信光寺は、越中における最初の曹洞宗寺院として、元亨3（1323）年に豊山紹璽の衣鉢によって、弟子の珍山源照によって創建された。豊山紹璽は、能登を中心活動し、総持寺（石川県門前町）や永光寺（石川県羽咋市）を開創している。室町時代に入ると、信光寺は神保氏や室町幕府の保護を受ける。文明10（1478）年に、永光寺とともに堂塔の修造にあたって、室町幕府は諸國勧進を命じている。また信光寺が築造された手洗野は、同じく豊山の弟子壇庵が簡が開創した法田紹光寺（水見市）を経て、永光寺に至る街道沿いに立地していることなどから、信光寺は永光寺との関係が深いことが伺える。

二上山養老寺

二上山養老寺は真言宗で、二上神社の別当寺である。二上神社は、明治政府が慶応4（1868）年に神仏分離を発令し、加賀藩によって翌明治2（1869）年に施行され、射水神社となつた。『越中史徵』に記されている貞享2（1685）年の寺社由縟によると、養老元（717）年に開基し、往古には講堂・鐘樓・堂塔・四十九院など寺数3800坊あり、境内には4門を構え、東門は城光寺村、北門は太田村渋谷、南門は大門村、西門は仁王門で手洗野村に対応する。翌年本社前に移したとされ、この範囲内が寺社領であったとされる。現在に至る養老寺の建物としては、護摩堂が二上射水神社の拝殿として残っている。

2. 従来の知見

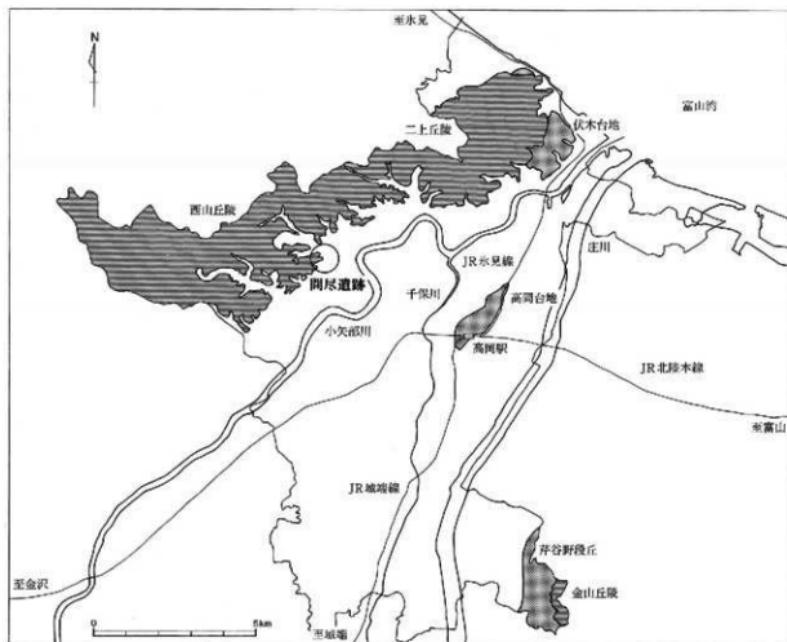
間屋遺跡

同間遺跡は、昭和45年～昭和47年にかけて実施された圃場整備事業にて多数の土器が出土したことによって明確に認識された。したがって、昭和47年刊行の『富山県遺跡地図』には記載されていない。出土した土器は、弥生上器、土師器、須恵器、珠洲等で、時代も弥生～中世と幅広く出土している。また、7世紀末の布目瓦や「梗令分」と判読できる墨書き土器もこの時に出土している。これらの出土遺物は、高岡市立国吉公民館に保管してある。

これまで当遺跡の名称は、「頭川遺跡」「頭川間尽遺跡」「間尽遺跡」として報告されてきた。平成5年に、分布調査や過去の工事中の出土遺物などが旧地名の大字手洗野小字間尽と大字頭川小字間尽を中心に拡がっていることから、名称を「間尽遺跡」とした。

頭川遺跡

昭和49年に上野草氏が『大境』にて、当遺跡を「頭川遺跡」として紹介した。この報告は、当遺跡にて表掲できた遺物を取り上げている。重要な点として、東日本を中心とする、弥生土器型式である「天王山式土器」を主体として出土し、さらに西日本を中心とする弥生土器型式である「櫛縞文土器」が判出することである。



第1図 遺跡位置図 (1:1(1/15万))



第2図 遺跡位置図 C23 (1／5万)

ある。遺構において、「天王山式土器」と「櫛描文式土器」との共伴関係の解明が当遺跡における今後の課題である。

分布調査

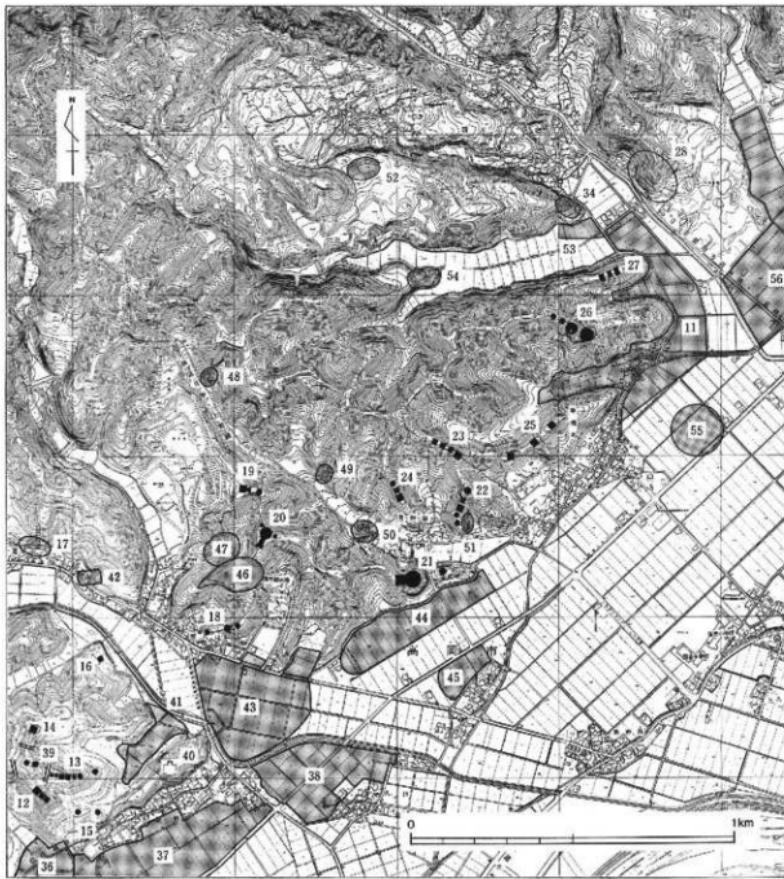
昭和59年に当遺跡を含む国吉地区において、分布調査を高岡市教育委員会が実施し、遺跡の範囲と内容を提示した。この時の成果は『西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報』Ⅱとして報告書を刊行している。報告書に記載した出土遺物は、圃場整備事業にて出土した遺物である。

頭川間尽遺跡

昭和62年に『北陸の古代寺院』(桂書房)が発行され、その中で西井龍儀氏が「頭川間尽遺跡」として当遺跡出土の古瓦を紹介し、この古瓦が出土した地点より内面返りの須恵器の杯蓋が出土している点から、古瓦をこの須恵器と同時期のものとし、7世紀末のものと推定した。さらに、当遺跡付近に瓦の供給先、あるいは瓦窯の存在を想定した。

平成5年度本調査

平成5年度に当遺跡で個人住宅の建設に伴い本調査を実施し『市内遺跡調査概報』Ⅱで報告した。この時は、溝を1条検出したが、遺物の出土は多くなく、この地区を遺跡の北端部と推定した。



第3図 遺跡地図(1)

- 11. 圆尾遺跡、12. 芦野口削Ⅰ古墳群、13. 芦野口削Ⅱ古墳群、14. 芦野口削Ⅲ古墳群、15. 芦野口削Ⅳ古墳群
- 16. 芦野春日古墳、17. 江道櫻穴墓群、18. 佐谷口谷内古墳群、19. 乾瀬堂古墳群、20. 男撰古墳群
- 21. 立山古墳群、22. 道ヶ谷内Ⅰ古墳群、23. 道ヶ谷内Ⅱ古墳群、24. 道ヶ谷内Ⅲ古墳群、25. 飯谷古墳群
- 26. 四十九古墳群、27. 安岡山古墳群、28. 朝川城ヶ平倅穴墓群、34. 朝川古墓群、36. 麻生谷遺跡、37. 柴野遺跡
- 38. 八口道跡、39. 柴野城ヶ平城跡、40. 柴野高の宮城跡、41. 柴野守普寺遺跡、42. 円通庵道跡、43. 乾八口道跡
- 44. 宮田道跡、45. 高辻道跡、46. 乾八口柴跡、47. 乾瀬堂道跡、48. 月野谷石舟道跡、49. 月野谷大谷内道跡
- 50. 月野谷干草遺跡、51. 道ヶ谷内遺跡、52. 明田Ⅰ遺跡、53. 道ヶ谷内Ⅰ遺跡、54. 道ヶ谷内Ⅱ遺跡
- 55. 手塚野赤壁道跡、56. 岩坪岡田島道跡



第4図 遺跡地図〔2〕(1/1万5千)

11. 開尽遺跡、28. 須川城ヶ平横穴墓群、29. 板屋谷内A古墳群、30. 板屋谷内B古墳群、31. 板屋谷内C古墳群
 32. 五十里古墳群、33. 五十里道神社古墳群、35. 五十里横穴?、55. 手沈野赤堀遺跡、56. 岩坪岡田島遺跡
 57. 五十里西遺跡、58. 五十里道重遺跡、59. 稲田藤の木遺跡、60. 百橋宮田遺跡

3. 遺跡の分布状態

頭川谷をめぐる遺跡

間尽遺跡は、頭川川が南東方向に流れている開析谷の入口の右岸平野部一帯に位置している。間尽遺跡の背後の丘陵尾根上には、安曇山古墳群と四十九古墳群が所在している。安曇山古墳群は3基の長方墳からなり、もっとも大きい規模である東側の墳丘は、東西14m、南北22m、高さ2.8mを計る。河原石が葺かれており、古墳群の西側に空堀状の大溝があり、菅などの墓壇状遺構の可能性もある。四十九古墳群は5基の円墳からなり、2基の大型円墳を基幹としている。大きさは、第1号墳が直径44m、高さ6mを計り、円墳では県内3番目の大きさである。

間尽遺跡の対岸の位置に、頭川城ヶ平横穴墓群が所在している。頭川城ヶ平横穴墓群は、頭川谷左岸の丘陵崖面にあり、20基の横穴墓を確認している。頭川城ヶ平横穴墓の北側には、頭川オスキノ原遺跡と雄川宮中遺跡があり、いずれも縄文時代中期の遺跡である。間尽遺跡の北端で、西に延びる支谷がある。この支谷の入口左岸には越ヶ谷内Ⅰ遺跡がある。この遺跡からは、縄文晩期中葉の口縁に装飾突起を持つ縄文土器をはじめ、土師器、須恵器、珠洲等が出土している。越ヶ谷内Ⅰ遺跡の北方丘陵上には頭川古墓が所在しているが、実体は不明である。支谷の奥には越ヶ谷内Ⅱ遺跡が所在している。支谷左岸の尾根上には明田Ⅰ遺跡が所在し、弥生土器が出土している。

月野谷周辺の遺跡

間尽遺跡に南接する丘陵尾根上には倉谷古墳群がある。平成9年からの発掘調査で弥生終末期の方形台状墓と判明した。この尾根づたいに南へ行くと、道ヶ谷内Ⅰ～Ⅲ古墳群が所在している。道ヶ谷内Ⅰ～Ⅲ古墳群の麓に月野谷集落がある。集落の西側には道ヶ谷内遺跡がある。集落の南側の小丘陵上には立山古墳群があり、第1号墳は全長67mを計る前方後円墳になる可能性がある。月野谷の中程に月野谷千草遺跡があり、谷奥には月野谷大谷内遺跡がある。さらに、谷を遡ったところに月野谷石飛遺跡がある。月野谷の右岸尾根上には、男傍古墳群、駿迎堂古墳群がある。男傍古墳群は、平成11年に富山考古学会により測量調査が行われ、全長58mの前方後円墳を基幹として、方墳1基と円墳1基の計3基からなる古墳群と確認された。この前方後円墳は、前方部と後方部との比高差が6mと大きく、また古墳側の高さが一定ではないことなどから、出現期の前方後円墳と推測される。駿迎堂古墳群は、前方後方墳1基と円墳1基からなる古墳群である。立山古墳群の南側平野部には宮田遺跡、高辻遺跡が拡がる。

男傍古墳群の西側の谷は広谷川によって造られた開析谷で、この谷の左岸に江道横穴墓群、笹八口谷内古墳群、円通廻遺跡、笹八口遺跡、篠八口若跡、駿迎堂遺跡が所在する。江道横穴墓群は、平成8年に高岡市教育委員会が発掘調査を行い、新たに9基の横穴墓を加え、20基からなる横穴墓群であることを確認している。

岩坪周辺の遺跡

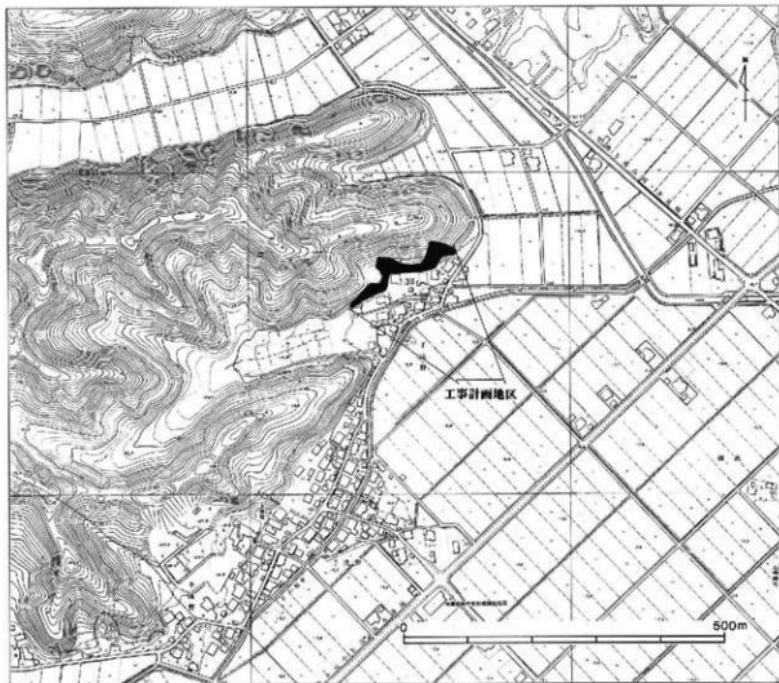
富山県西部と能登地域を結ぶ能越自動車道が国吉地区を通過することになり、そのため平成10年に財団法人富山県文化振興財團によって遺跡の分布調査および試掘調査が行われ、2つの新しい遺跡が確認された。間尽遺跡の南方約300mの位置に手洗野赤浦遺跡がある。この遺跡は平成11年に財団法人富山県文化振興財團が発掘調査を行い、中・近世の遺構を検出した。また、間尽遺跡から北東600mの位置に岩坪岡田島遺跡があり、平成11年に高岡市教育委員会が試掘調査をした結果、中世の井戸址や溝等を検出した。とりわけ、珠洲I・II期を中心とした中世前期の遺物が多量に出土した。

第2節 調査概観

1. 調査に至る経緯

工事計画

手洗野地区では、斜面の高さが10~40m、勾配が30~40度の崖下に人家が連帶しており、地山の風化が進行していることから、豪雨時等には斜面崩壊による人的被害の発生が懸念されていた。このためコンクリート擁壁工事が計画された。この工事は「手洗野地区急傾斜地崩壊対策事業」として「手洗野（1）地区」と「手洗野（2）地区」として2箇所において計画された。「手洗野（1）地区」が南側に位置し、倉谷古墳群のある丘陵尾部の南東側斜面であり、「手洗野（2）地区」が北側に位置し、四十九古墳群のある丘陵尾部の南東側斜面である。



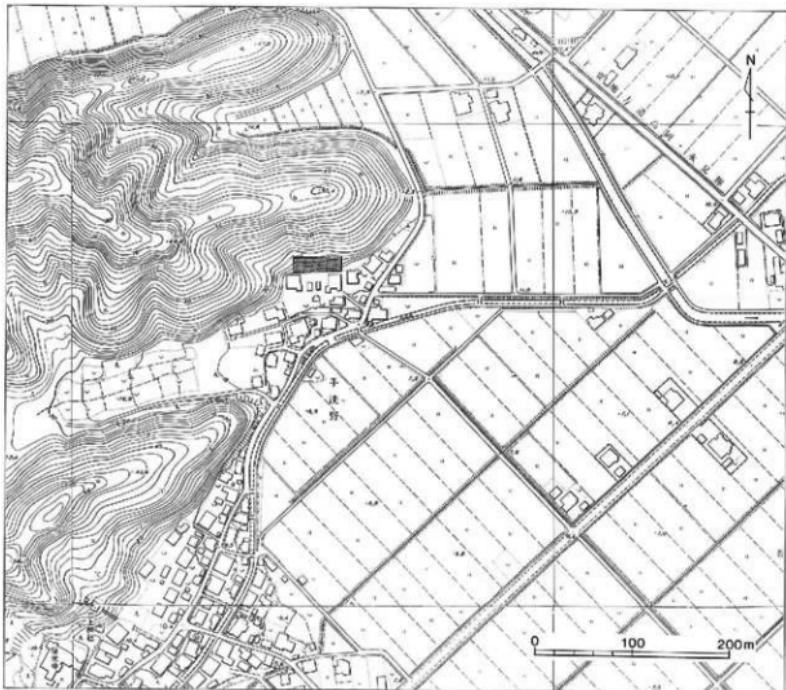
第5図 工事区域位置図 (1/7,500)

協議

「手洗野（2）地区」の工事地区は、周知の埋蔵文化財包蔵地である閔忌遺跡の範囲に含まれている地区である。工事計画では、谷部の入口から谷奥へ向かって分割して工事をして実施していくものであった。計画段階で、工事主体者の県高岡土木事務所工務第2課、市の担当である建設部土木維持課、そして市教育委員会文化財課の各担当者が合同で現地を踏査した。土器類が散布しており、中世の石塔頭も散乱している状態であり、埋蔵文化財包蔵地であることを再確認した。

その後の連絡調整が不十分で、北東側の工事が実施されてしまった。これは平成7年度分の工事で、市教育委員会文化財課の担当者がこの事実に気づき、現地を踏査し、土器類が散布していることを知ったのが、平成8年度当初であった。そして、再度埋蔵文化財の保護に遺漏のないようにし、工事に先立って、協議や発掘・試掘調査の実施を申し入れた。

平成8・9年度は工事予定ではなく、平成10年度事業として工事が計画されることになった。そこで当該地区的試掘調査を実施することに至った。



第6図 調査地区位置図 (1/5,000)

2. 発掘調査の経過

試掘調査

試掘調査は高岡市教育委員会の文化財課が担当し、平成10年2月20日から同年2月26日まで実施した。試掘調査では、試掘坑を3箇所設定した。試掘面積は25m²である。遺構として礫群・溝状の落ち込み・盛土状の堆積を確認し、遺物として上師器・珠洲・青磁等が出土した。

のことから、本調査地区は出土遺物や周辺の石塔類から中世を中心とした遺構によって構成され、遺跡の性格としては、中世墳墓等の可能性を想定した。

これらの所見をもとに、本調査を実施することに至った。

発掘調査の開始

発掘調査は高岡市教育委員会の文化財課が担当し、山武考古学研究所（所長：平岡和大）の協力を得て、実施することになった。調査は平成10年4月2日から実施した。準備等に手間取ったため、本格的な掘削は4月20日からとなった。調査地区は東側調査地区、中央調査地区、西側調査地区と3箇所設定した。東側調査地区は東側急斜面、中央調査地区は中央平坦面、西側調査地区は西側急斜面にそれぞれ当たる。それぞれの調査地区的表土除去は小型のバックフォーを使って行った。

調査地区的面積に見合う排土置き場がほとんどなく、したがって絶えず排土をバックフォーとダンプカーによって場外へ搬出しなければならなかった。

まず、中央調査地区的表土除去から行った。地表から約15cm掘った地点で、礫群を確認したため精査を行った。出土した礫群の性格を量るために、精査が終了した時点で中央調査地区的掘削を中断し、東側調査地区の表土除去に移った。東側調査地区でも地表から約10cmほど表土を除去したところで、礫群および遺物が山上したので、精査を行い礫群、土縛群、硬化面等を確認した。東側調査地区も精査を終了した時点で掘削を中断し、西側調査地区的表土除去に移った。西側調査地区は急斜面であり、また排土置き場を造るために、土止めを造った後に表土除去を行った。バックフォーで地表から約20cm表土を除去した時点で、黄褐色砂層を確認し、この黄褐色砂層を地山層と判断し検出していった。しかしながら、黒褐色砂質土層がこの黄褐色砂層の下に潜り込んでいっていることが判明し、この黒褐色砂質土層を人力で検出し、精査を行った。全調査地区的精査が終了した時点で、1回目のラジコンヘリコプターによる空中写真測量および、調査地区的細部実測を行った。

発掘調査の展開

空中写真測量後、まず西側調査地区に3本のサブトレーンチを設定して、地山まで検出して遺構の有無を確認した。その結果、地山には遺構の痕跡はなく、包含層と考えていた暗褐色砂質土層から掘削された溝の痕跡を断面で確認した。西側調査地区を掘るには多量の土量が想定され、それに見合う排土置き場がないことと、また断面岡から溝の位置の復元が可能であったため西側調査地区的掘削を終了し、各サブトレーンチの実測および写真撮影を実施し、西側調査地区的調査を終了した。

中央調査地区と東側調査地区は、精査で検出した礫群を取り払い、地山まで掘削した後、遺構の検出を行った。地山面上で柵址、土坑、溝、凹地、ピットを確認しそれぞれの調査をした。これらの遺構の調査の後、中央調査地区と東側調査地区を仕切っていた上層觀察用の壁を取り払い、遺構の実測および写真撮影を実施した。

7月7日に2度目のラジコンヘリコプターによる空中写真測量を行い、7月10日に調査を終了した。

整理作業

整理作業は平成10年度にも一部実施したが、主に平成11年度事業として実施した。平成10年11月には、埋蔵文化財の展示会を市内の公民館（高岡市立二上公民館）で実施したとき、当遺跡についても、写真パネルや出土品の展示を行い、「平成9・10年度高岡市の発見から」と題した発掘調査の報告会で、本調査についてスライドを交えながら発表した。

3. 調査の概要

調査地区

調査地区は平坦面を中心一部斜面を含む箇所に位置する。中央部の平坦面を中央調査地区とし、幅1mの十層観察用駐を境に東側緩斜面を東側調査地区、西側急斜面を西側調査地区と設定した。発掘調査が進み、中央調査地区的調査を終えた時点で、東側調査地区と中央調査地区との土層観察用の駐を取り払い、最終的に東側調査地区と中央調査地区を1つの区画とした。

基本調査

中央調査地区では、表土の厚さが山側で50cm、谷側で5cmあり、表土を除去すると、暗褐色砂質土、黒褐色砂質土、黃褐色砂からなる地山の順に現れる。地山は一部削平され、南側すなわち開析谷側に落ち込んでいる。調査地区は丘陵の裾部に当たる地点で、上部からの流土がかなりあり、場所によっては多量の流土が覆い被さっている地点もある。

検出遺構

検出遺構は次の通りである。

平坦面1面（S X01）

柵址1条（S A01）

土坑4基（S K01～04）

溝2条（S D02・03）

円地1基（S X02～05）

出土遺物

出土遺物は次の通りである。

土器類：繩文土器、土師器、須恵器、瓦質土器、珠洲、中世瓷器系陶器、瀬戸美濃、青磁、越中瀬戸、肥前、製塙土器

上製品：土鍤、罐の羽口、炉壁（炉壁は細片のため表示していない）

鉄製品：鉄釘、鉄滓（鉄滓は図示していない）

銅製品：銅釘、銅錢

グリッド

調査地区的グリッドは平面直角座標系の第7座標系（原点は北緯36° 00' 00"・東経137° 10' 00"）に合わせた。東西をX軸、南北をY軸とし、グリッドの南西隅の数値がそのグリッドを表すものとし、X=1、Y=1の地点は、原点より西へ17.770km、北へ84.345km向かった位置である。一辺5m四方を一区画としてグリッドを割り付け、メッシュを表示した。

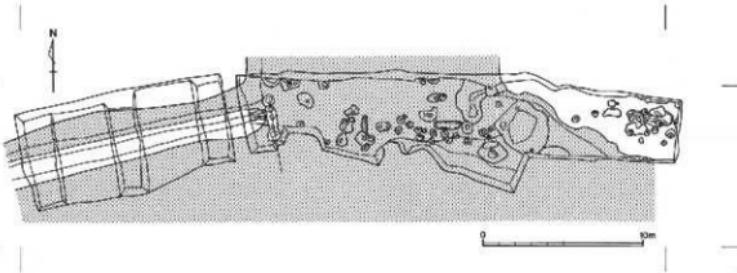
第2章 遺構

第1節 平坦面

1. 平坦面

平坦面 S X01

調査地区の大半を覆っている。平坦面は凸字状に地山を削平した後、盛土し整地したものである。遺構の四方は調査地区外である。規模は幅36.00m以上、奥行き7.00m以上である。張出部の幅は15.00mを計る。SK02、SK04、SD02、SX04は、地山削平面を基盤層としている。SA01、SK01、SD03、SX04、ピット群は、この盛土整地面を基盤層としている。SX01を造成する際の地山の削平は標高11.8~12.2m、盛土による整地は標高12.2~12.8mでそれぞれ行われている。東側調査地区から中央調査地区にかけての盛土は18~50cmの厚さで、暗褐色砂質土を盛っている。西側調査地区では、旧地形の削りだしのみで平坦面を造成している。東側調査地区から中央調査地区にかけての南端で地山部分の落ち込みを確認した。この落ち込みは現在の地形でも調査地区的両側は約60cmほど低くなってしまっており、また平坦面を造成する際の盛土で埋められていることから、自然地形によるものである。本遺構の範囲は下記の第7図に図示した。また、東側調査地区から中央調査地区にかけての北壁の断面図は図面4に図示した。出土遺物は、土師器、須恵器、瓦質土器、土師質土器、珠洲、中世瓷器系陶器、瀬戸美濃、青磁、鉄釘、銅釘である。図示した遺物は図面8-1041~1045・1049~1051・1053・1055~1057・1059~1063・1065~1067・1069・1071~1076・1078~1080・1082・1083・1086・1087、図面9-1091・1097・1099、図面10-1102~1105、図面11-1106・1113、図面12-1120、図面16-3001~3003・4001~4003である。



第7図 平坦面 S X01位置図 (1/300)

第2節 その他の遺構

1. 棚 址

棚址 S A01

東側調査地区の西部（4，2）区で検出された。方位は、真北に対し10度西へ偏っている。柱穴の掘り方は円形で、布掘りを施している。長さ2.80m以上、幅0.58～0.76m、深さは地山面から柱穴部分が20～30cm、布掘り溝部分が10cmを計る。S D03と直行し、またS X01の突出部の西辺と接し平行することから、これらの遺構と一緒に存在しているものと思われる。遺物は出土していない。

2. 土 坑

土坑 S K01

東側調査地区の西部（4，3）区で検出された。遺構の北側は調査地区外である。確認された部分の平面形は略半円形で、規模は長軸1.10m、深さ10cmを計る。S K02・S X01を切っている。遺物は出土していない。

土坑 S K02

東側調査地区の西部（4，3）区で検出された。遺構の北側は調査地区外である。確認された部分の平面形は不整円形で、規模は長軸1.20m、深さ20cmを計る。S K01・S X01に切られている。遺物は出土していない。

土坑 S K03

東側調査地区の西部（4，2）区で検出された。平面形は不整円形で、規模は長軸1.20m、短軸0.90m、深さ20cmを計る。S X01との切合の関係は不明である。遺物は出土していない。

土坑 S K04

東側調査地区の西部（4，3）区で検出された。遺構の北側は調査地区外である。平面形は円形で、規模は長軸0.66m、深さ40cmを計る。S X01に切られている。遺物は出土していない。

3. 溝

溝 S D02

東側調査地区の西部（3，2）区で検出された。東西に走る溝であり、規模は幅40～50cm、深さ10cmを計る。1.10m以上に亘り検出され、東端はS A01につながり、西端は調査地区外へと延びている。西側調査地区のサブトレンチでは確認できなかったので、調査区の間で終わっているものと推測できる。平坦面S X01の地山削平面上に構築された。遺物は出土していない。

溝 S D03

中央調査地区の西部（3・2）区および、西側調査地区全体で確認された。東西に走る溝であり、規模は幅1.40～1.50m、深さ50～70cmを計る。斜面地であったため平面検出は困難であり、中央調査区西壁および西側調査地X各サブトレーンチの断面図から想定した。想定した長さは15.0m以上で、西側は調査地X外へ延びている。各サブトレーンチでの土層断面図は図面2・図面3、平面復元図は図面5として図示した。

土層は次の通りに分類できる。第I層；第a～d層、黄褐色砂が中心。第II層；第e・f層、黒褐色砂質土が中心。第III層；第g～k層、暗褐色砂質土が中心。

溝の断面は逆台形である。第I層からは上部器皿が出土し、第II・III層からは遺物は出土していない。第I層から出土した遺物の年代は16世紀であることから、この溝の廃絶時期は16世紀である。SX01の整地面に構築されている。図示した遺物は、図面8-1084である。

4. 四 地

四地 SX02

東側調査地区の東部（8・2）区で確認された。緩斜面状に位置し、逆L字状に小溝が廻る遺構を中心に、周辺のピットや焼土・硬化面を含めて本遺構とした。本遺構の範囲は東西5.32m×南北2.78mに亘って確認され、遺構の北側および東側は調査地区外である。逆L字状の溝の規模は長さ2.80m、幅0.32～0.86m、深さ18cmを計る。周辺のピットは11基あり、規模は直徑0.36～1.00m、深さ20～37cmを計る。焼土・硬化面は長軸0.24～1.92m、短軸0.10～0.66mを計る。断面図は図面3に、平面図は図面6にそれぞれ図示した。出土した遺物は、上部器、須恵器、製塙土器、土鍤、輪の羽11、炉鉢である。土鍤の出土状態は図面6に図示した。図示した遺物は図面7-1001・1003～1008・1010・1012・1014～1016・1018・1020・1022・1024・1029・1032～1038、図面9-1096、図面12-1134、図面13-2002～2005・2007～2010・2012、図面14-2014～2016・2019～2023、図面15-2025・2027・2028・2031・2032・2034、図面16-2037である。

四地 SX03

東側調査区の中央部（6・2）区で確認された。規模は長さ3.80m以上、幅1.60m、深さ20cmを計る。北側は調査地区外となる。断面図から平坦面SX01の整地面の下層になり、平坦面を造成するときに抜いた木根の可能性がある。遺物は出土していない。

四地 SX04

東側調査区の中央部（6・7・2）区で確認された。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸3.24m、短軸1.94m、深さ50cmを計る。平坦面SX01削平面を掘り込んでいる。機能・性格については不明である。出土遺物は、珠洲、青磁、土鍤、銅鏡（元豐通宝）である。図示した遺物は、図面7-1013、図面8-1040、図面9-1093、図面12-1121、図面14-2013・2018、図版22-4004である。

四地 SX05

東側調査区の中央部（6・7・2）区で確認された。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸1.88m、短軸2.94m、深さ40cmを計る。遺構の北側は長さ70cmと大きくオーバーハングしている。不整形な形から木根の可能性が高い。出土遺物は、土師器、珠洲である。図示した遺物は、図面7-1002である。

番号	上色・土質	番号	上色・土質	番号	土色・土質
	表土・包含層	43	褐色砂質土	j	暗褐色砂質土
1	黒褐色砂質土	44	暗褐色砂質土	k	暗褐色砂質土
2	黄褐色砂質土	45	暗褐色砂質土、礫含む	S X O 1	
3	褐色砂質土	46	暗褐色砂質土、しまりあり	121	褐色砂質土
4	褐色砂質土	47	暗褐色砂質土、しまりあり	122	暗褐色砂質土
5	黒褐色砂質土	48	褐色シルト、しまりあり	123	暗褐色砂質土
6	暗褐色砂質土	49	褐色砂質土、しまりあり	124	黒褐色砂質土
7	暗褐色砂質土	50	黄褐色砂質土、しまりあり	125	褐色砂質土
8	褐色砂質土	51	褐色砂質土、しまりあり	126	暗褐色砂質土、硬化している
9	暗褐色砂質土	52	黒褐色砂質土、しまりあり		
10	暗褐色砂質土	53	黒褐色砂質土	127	暗褐色砂質土、硬化している
11	暗褐色砂質土	54	暗褐色砂質土、しまりあり		
12	暗褐色砂質土	55	黒褐色シルト	128	暗褐色砂質土
13	褐色砂質土	56	明黄褐色砂質土	129	暗褐色砂質土
14	黒褐色砂質土		S K O 1	130	褐色砂質土
15	疊層、φ40~130mmの礫	101	黒褐色砂質土		S X O 2
16	明黄褐色砂		S K O 2	131	黒褐色砂質土・黄褐色砂質土の混土層、硬化している
17	暗褐色砂質土、しまりあり	102	暗褐色砂質土		
18	明黄褐色砂質土	103	暗褐色砂質土・褐色砂質土の混土層	132	黒褐色砂質土・黄褐色砂質土の混土層
19	疊層、φ20~150mmの礫				
20	黒褐色砂質土		S K O 4	133	褐色砂質土
21	黒褐色砂質土	104	黒褐色砂質土	134	黒褐色砂質土・黄褐色砂質土の混土層、硬化している
22	明黄褐色砂質土		S D O 2		
23	暗褐色砂質土	111	黒褐色砂質土、しまりあり	135	暗褐色砂質土
24	明黄色砂		S D O 3	136	暗褐色砂質土
25	褐色砂、礫を含む	a	暗褐色砂質土		S X O 3
26	暗褐色砂質土、しまりあり	b	暗褐色砂質土	137	黒褐色砂質土
27	明黄褐色砂	c	明黄色砂	138	暗褐色砂質土
28	明黄褐色砂、礫を含む	d	暗褐色砂質土	139	黒褐色砂質土
29	暗褐色砂質土	e	黒褐色砂質土	140	暗褐色砂質土
30	黒褐色砂質土	f	黒褐色シルト	141	褐色砂質土、小砂利を含む
31	暗褐色砂質土	g	暗褐色砂質土・明黄褐色砂質土の混土層	142	褐色砂質土、小砂利を含む
	中世基盤層			143	暗黃褐色砂質土
41	暗褐色砂質土、しまりあり	h	暗褐色シルト	144	暗黄色砂質土
42	黒褐色砂質土、しまりあり	i	暗褐色砂質土	145	黄橙砂質土

第1表 土層一覧表

第3章 遺物

第1節 土器類

1. 縄文土器

破片はいずれも細片であるため、図示はしていない。深鉢と思われる。細い半隆起線と単節縄文が施文された細片が1点出土しており、縄文時代中期のものと忘れる。

2. 土師器（古代）

主に10世紀代を中心とした平安時代の土師器である。六節器には通有のものと黒色処理しているもの（黒色土器）とがある。後者はいわゆる内黒土器であるが、1点のみ内外面とも黒色化したものがある。

土師器

椀 A 図面7-1001～1010。高台の付かない椀の底部である。調整手法は内外面ともロクロナデで、底部は回転糸切りである。1001は底径5.2cmを計る。1002は底径6.0cmを計る。1003は底径5.1cmを計る。1004は底径4.9cmを計る。1005は底径5.9cmを計る。1006は底径4.8cmを計る。1007は底径5.0cmを計る。1008は底径4.8cmを計る。1009は底径4.5cmを計る。1010は底径4.3cmを計る。

皿 A 図面7-1011・1012。高台の付かない皿である。調整手法は内外面ともロクロナデで、底部は回転糸切りである。1011は口径9.5cm、底径3.7cm、器高2.45cmを計る。口縁部はやや外反し、内部にはタール状の物が付着する。1012は口径11.2cm、底径4.5cm、器高2.05cmを計る。

椀・皿底部A類 図面7-1013～1017。高台の付かない椀もしくは皿の底部である。調整手法は内外面ともロクロナデで、底部は回転糸切りである。1013は底径6.8cmを計る。1014は底径5.4cmを計る。1015は底径5.0cmを計る。1016は底径5.1cmを計る。1017は底径4.0cmを計る。

椀・皿底部B類 図面7-1018～1024。足高台が付く椀・皿の底部である。調整手法は内外面ともロクロナデである。1018は底径8.2cmを計り、底部は回転糸切り後ナデを施す。1019は底径7.9cmを計り、底部は回転糸切りである。1020は底径7.8cmを計り、底部に回転糸切り後ナデを施す。1021は底径7.0cmを計り、底部に回転糸切り後ナデを施す。1022は底径6.6cmを計り、底部に回転糸切り後ナデを施す。1023は底径5.5cmを計り、底部に回転糸切り後ナデを施す。1024は底径7.7cmを計り、底部に回転糸切り後ナデを施す。

皿B 図面7-1025。高台が付く皿である。口径11.0cm、底径5.4cm、器高2.65cmを計る。調整手法は内外面ともロクロナデである。底部は回転糸切り後ナデを施す。

椀口縁部 図面7-1026。椀の口縁部である。口径11.2cmを計る。

黒 岡面 7 - 1027。窓の口縁部である。口径21.8cmを計る。脚部より口縁部が内窓して外上方へ拡がる。口端部にはつまみ上げを施す。調整手法は内面がナデ、外面が刷毛目である。

黒色土器

楕口縁部 図面 7 - 1028・1029。口縁部は内窓する。調整手法は内面にミガキ、外面にロクロナデを施す。1028は口径14.0cmを計る。1029は口径16.0cmを計る。

楕底部A類 図面 7 - 1030・1031。高台の付かない底部である。調整手法は内面にミガキ、外面にロクロナデを施す。底部は回転糸切りである。1030は底径6.9cmを計る。1031は底径6.0cmを計る。

楕B 図面 7 - 1032。高台が付く楕である。高台部は取れている。口径11.7cm、底径4.9cm、器高3.3cmを計る。内外面とも黑色化し、口縁部は外反する。底部は回転糸切りである。調整手法は内外面ともミガキである。9世紀のものである。

楕底部B類 図面 7 - 1033～1039。高台が付く楕の底部である。調整手法は内面にミガキ、外面にロクロナデを施す。1033は底径7.6cmを計る。やや足高の高台が付き、底部は回転糸切り後ナデを施す。1034は底径7.0cmを計る。やや足高の高台が付き、底部は回転糸切りである。内外面には炭素が吸着していないが、調整手法が黒色土器と同じため黒色土器に含めた。1035は底径6.0cmを計る。低い高台が付き、底部は回転糸切りである。1036は底径7.4cmを計る。つまみ出したような高台が付き、底部は回転糸切りである。1037は底径8.6cmを計る。つまみ出したような高台が付き、底部は回転糸切りである。体部外面には1本の沈線を施す。1038は底径5.1cmを計る。つまみ出したような高台が付き、底部は回転糸切り後ナデを施す。1039は底径6.8cmを計り、つまみ出したような高台が付き、底部は回転糸切りである。

3. 土師器（中世）

主に15～16世紀代の土師器である。

皿R類 図面 8 - 1040～1045。ロクロを使用しているものである。1040～1043は口縁部が面取り気味に直立するものである。口径は8.1～8.7cmを計る。体部の器壁は薄く、底部は回転糸切り後ナデを施す。15世紀のものである。1040・1042・1043にはタール状の付着物が付く。1044・1045は口縁部がつまみ上げたようになる。体下部外側は手持ちヘラ削りしている。口径は13.4～14.4cmを計るものである。体部の器壁は薄い。15世紀第4四半期である。

皿N類 図面 8 - 1046～1088。非ロクロの手づくね製法の製品である。体・底部はナデや指圧によって調整する。1046～1060は口端部を丸くおさめるものである。口径は6.6～9.0cmを計る。1046は13世紀後半～14世紀、1047～1055は15世紀前半、1056～1060は15世紀後半のものである。1059はタール状の付着物が付く。1061～1063は口縁部が外反気味に拡がるものである。口径は11.2～12.2cmを計る。15世紀後半のものである。1064～1068は口端部をややつまみ上げるようにするものである。口径は8.2～8.8cmを計る。1064は15世紀後半まで遡る可能性があり、1065～1068は16世紀のものである。1065はタール状の付着物が付く。1069～1088は口端部がつまみ上げたような形態をとるものである。口径は8.0～10.7cmを計る。16世紀第2四半世紀～中期のものである。1074・1075・1077・1081・1085はタール状の付着物が付く。

4. 須恵器

古墳時代

瓶類 図面9-1095。瓶頸の口縁部である。口径11.6cmを計る。口縁部は外上方へ延びた後、外面に棱を内面に段をなして括がる。調整は内外面ともロクロナデを施す。

甕 図面9-1096。甕の口縁部である。口径24.2cmを計る。口縁部の上方につまみ上げを施し、口縁部の調整は内外面ともロクロナデである。体部の調整は内面に同心円痕のナデ消し、外面に平行叩きを施す。

古代

杯A 図面9-1089~1091。高台の付かない杯である。1089は口径11.4cm、底径6.9cm、器高3.5cmを計る。調整手法は体部ではロクロナデ、底部ではヘラ切り後ナデを施す。1090・1091は杯底部である。1090は底径8.2cmを計り、底部はヘラ切り後ナデを施す。1091は底径9.8cmを計り、底部はヘラ切りである。

杯B類底部 図面9-1092。高台が付く杯の底部である。底径7.4cmを計る。

杯口縁部 図面9-1093・1094。杯の口縁部である。調整手法は内外面ともロクロナデである。1093は口径14.0cmを計る。1094は口径11.4cmを計る。

壺口縁部 図面9-1097。大型の壺の口縁部である。口端部近くに突筋がある。調整手法は内外面ともロクロナデである。口径67.6cmを計る。

甕頸部 図面9-1098。大型の甕の頸部である。調整手法は頸部が内外面ともロクロナデ、肩部は内面に同心円筋、外面に格子叩きを施している。

5. 瓦質土器

一般的に中世に使われる火鉢・風炉・香炉などの上器を瓦質土器と称する。しかし北陸の在地窯においては器種が同じでも焼していない土器も生産しているため、今回の報告では「焼しているもの」を『瓦質土器』とし、「焼していないもの」を『土師質上器』とした。

瓦質土器

耳 図面9-1099。大型容器（鍋・釜・楕円等）の耳になるようになると思われる。

深鉢 図面10-1100。在地産の火鉢である。口径23.6cm、底径21.0cm、器高18.8cmを計る。

土師質土器

火鉢底部 図面10-1101・1102。底部には脚の痕跡がある。1101は底径14.0cmを計る。1102は底径18.0cmを計る。

香炉 図面10-1103。口径14.4cm、底径12.6cm、器高12.0cmを計る。口縁部は波状に外反し、底部に脚を持つ。体部には菊花文のスタンプを施した後、1条の突帯を貼付ける。

風炉 図面10-1104・1105。1104と1105は同一個体と思われる。1104は口縁部である。口径33.0cmを計る。胴部上方に2条、中央に1条それぞれ突帯を設ける。上方2条の突帯の間に菊花文のスタンプを施し、体部上方には窓を設ける。1105は底径27.4cmを計る。窓を設け、底部下方に1条の突帯を設ける。

6. 珠洲

擂鉢口縁部 図面11-1106～1109。1106は口径39.7cmを計る。オロシ目幅は2.5cmで、条数は9条である。調整手法は内外面ともロクロナデである。1107は口径30.0cmを計る。調整手法は内外面ともロクロナデである。1108は口径42.7cmを計る。口縁部には波状文を施す。オロシ目幅は2.0cmで、条数は7条である。調整手法はロクロナデである。1109は口径30.0cmを計る。口縁部には波状文を施す。オロシ目幅は3.0cmで、条数は11条である。調整手法はロクロナデである。いずれも珠洲V期に含まれる。

擂鉢底部 図面11-1110・1111。1110は底径9.0cmを計る。オロシ目幅は1.6cmで、条数は7条である。1111は底径17.2cmを計る。オロシ目幅は1.4cmで、条数は6条である。いずれも珠洲V期に含まれる。

鉢・壺類底部 図面11-1112・1113。調整手法は内外面ともロクロナデである。1112は底径11.5cmを計る。1113は底径13.4cmを計る。いずれも珠洲V期に含まれる。

壺口縁部 図面11-1114～1116。破片が小さいため、口径を割り出すことは出来なかった。体部外面は平行叩きを施す。いずれも珠洲V期に含まれる。

7. 中世瓷器系陶器

擂鉢 図面12-1117。いわゆる越前写しである。底径15.0cmを計る。オロシ目幅は1.3cmで、条数は9条である。調整手法は内外面ともロクロナデである。黄褐色を呈し、やや軟質である。

壺・壺類底部 図面12-1118。产地は不明である。底径14.6cmを計る。内傾する貼付高台が付く。調整手法は内外面ともロクロナデである。

8. 中世陶磁器

瀬戸美濃

合子 図面12-1119。底径5.4cmを計る。内外面とも灰釉を施釉し、底部は露胎している。胎土は青灰色を呈す。調整手法は体部がロクロナデを施し、底部は回転糸切りである。瀬戸後IV期古である。

香炉 図面12-1120。舟形香炉である。口径11.6cm、底径6.0cm、高さ4.6cmを計る。底部には3足の低い脚が付く。口端部内面と口縁・体上部外面に灰釉を施釉し、体下・底部外面と内面のほとんどは露胎している。胎土は青灰色を呈す。調整手法は体部がロクロナデを施し、底部は回転糸切りである。瀬戸後IV期古である。

青磁

橈類底部 図面12-1121・1122。橈の底部である。高台は削り出し高台である。1121は底径5.35cmを計る。高台は露胎している。1122は底径8.0cmを計る。胎土は赤褐色を呈し、焼成は無い。

9. 近世陶磁器

越中瀬戸

椀 図面12-1123・1124。削り出し高台の椀である。底部は露胎する。1123は口径10.0cm、底径6.2cm、器高6.7cmを計り、灰釉を施釉する。胎土は褐色を呈し、粒子は粗い。18世紀のものである。1124は口径10.4cm、底径5.6cm、器高6.5cmを計り、結釉を施釉する。胎土は灰褐色を呈す。17世紀のものである。

皿 図面13-1125。口径10.8cm、底径4.4cm、器高2.4cmを計る。口縁部には結釉を施釉し、底部および内面は露胎する。胎土は灰褐色を呈す。

楕円類底部 図面12-1126～1128。削り出し高台の楕円類の底部である。底部および内面下部は露胎する。1126は底径5.2cmを計り、灰釉を施釉する。底部および内面下部は露胎する。胎土は赤褐色を呈す。18世紀のものである。1127は底径4.2cmを計り、灰釉を施釉する。底部および内面下部は露胎する。胎土は赤褐色を呈す。18世紀のものである。1128は底径5.6cmを計り、灰釉を施釉する。底部は露胎する。胎土は淡褐色を呈す。18世紀のものである。

擂鉢 図面12-1129。口径27.5cmを計る。オロシ目幅は2.5cmで、条数は11条である。調整手法は内外面ともロクロナデである。胎土は淡褐色を呈し、焼成は悪い。

肥前

椀 図面13-1130～1133。1130は陶器の椀である。口径11.5cm、底径4.8cm、器高3.6cmを計り、綠釉を施釉し、底部は露胎する。胎土は褐色を呈する。高台は削り出し高台である。17世紀のものである。1131は陶器の楕の底部である。底径4.7cmを計り、灰釉を施釉し、底部は露胎する。胎土は褐色を呈する。17世紀のものである。1132は陶胎染付の楕の底部で、底径4.8cmを計る。釉は青緑色を呈し、胎土は青灰色を呈する。18世紀のものである。1133は染付の楕である。口径11.8cm、底径4.2cm、器高3.6cmを計る。内面には井須で斜格子文を描く。底部は削り出し高台である。

10. 製塙土器

深鉢口縁部 図面13-1134。口径22.0cmを計り、外面に指仕痕と接合痕がある。胎土は赤橙色を呈し、海綿骨針が混和する。

深鉢体部 図面13-1135。体部破片である。接合痕がある。胎土は赤橙色を呈し、海綿骨針が混和する。

深鉢底部 図面13-1136～1138。1136は底径16.8cmを計る。接合痕を残す。胎土は赤橙色を呈し、海綿骨針が混和する。1137は外面に接合痕を残す。胎土は赤橙色を呈し、海綿骨針が混和する。1138は底径24.8cmを計る。胎土は赤橙色を呈し、海綿骨針が混和する。

第2節 その他の遺物

土錐 図面13-2001～図面15-2036。土師質で擣形の土錐である。土錐は大きく分けて次の3つに分かれ
る。土錐の大きさは第2表にまとめた。

2001～2012：大型のものである。長さ5.7～6.3cm、幅4.8～5.4cmを計る。

2013～2030：中型のものである。長さ4.6～5.9cm、幅4.5～5.4cmを計る。

2031～2036：小型のものである。長さ3.2～5.2cm、幅3.0～5.2cmを計る。

縄の羽口 図面16-2037。口部がガラス質化している。

鉄釘 図面16-3001～3003。断面は方形である。3003はL字状に曲がる。

銅釘 図面16-4001～4003。小さい頭部が付き、断面は方形である。

銅鏡 図版22-4004・4005。4004は元豐通宝（北宋、1078）の真書体である。4005は宣永通宝である。

番号	図面	図版	長さ	直径	孔径	残存状態	番号	図面	図版	長さ	直径	孔径	残存状態
2001	14	20-1	6.1	5.4	2.0	一部欠損	2019	15	21-1	5.4	4.5	1.6	完形
2002	14	20-1	6.3	5.1	2.0	ほぼ完形	2020	15	21-1	6.1	4.8	1.6	一部欠損
2003	14	20-1	6.3	5.2	1.8	完形	2021	15	21-1	5.8	4.6	1.6	一部欠損
2004	14	20-1	6.2	5.0	1.8	完形	2022	15	21-1	5.8	4.8	1.7	一部欠損
2005	14	20-1	6.0	5.4	2.0	- 部欠損	2023	15	21-1	5.6	4.6	1.7	一部欠損
2006	14	20-1	6.0	5.0	2.0	- 部欠損	2024	15	21-1	5.4	4.8	1.8	一部欠損
2007	14	20-1	5.8	5.0	1.8	ほぼ完形	2025	16	21-1	5.9	5.4	1.9	半分残存
2008	14	20-1	5.9	5.1	1.8	ほぼ完形	2026	16	21-1	5.0	5.1	1.8	半分残存
2009	14	20-1	5.8	4.8	1.6	完形	2027	16	21-1	5.3	4.9	1.8	半分残存
2010	14	20-2	5.7	5.0	1.6	- 部欠損	2028	16	21-2	5.6	5.0	1.8	半分残存
2011	14	20-2	5.8	5.0	1.6	- 部欠損	2029	16	21-2	4.8	5.2	2.0	半分残存
2012	14	20-2	6.0	4.8	1.8	ほぼ完形	2030	16	21-2	4.6	5.2	2.3	半分残存
2013	15	20-2	5.6	5.2	1.8	- 部欠損	2031	16	21-2	5.3	4.4	1.7	半分残存
2014	15	20-2	5.7	5.3	1.8	- 部欠損	2032	16	21-2	5.0	4.2	1.3	半分残存
2015	15	20-2	5.6	4.8	1.8	- 部欠損	2033	16	21-2	4.4	4.0	1.6	一部欠損
2016	15	20-2	5.6	5.0	1.8	- 部欠損	2034	16	21-2	3.8	5.2	1.4	完形
2017	15	20-2	5.7	4.8	1.8	ほぼ完形	2035	16	21-2	3.9	4.0	1.4	一部欠損
2018	15	20-2	5.6	4.8	1.9	半分残存	2036	16	21-2	3.2	3.0	1.0	半分残存

第2表 土錐計測表（単位cm）

第4章 結語

1. 遺構

平坦面S X01について

平坦面S X01は東西方向に走る尾根に対して前角に入り込む小さな谷を利用して造成されたものである。S X01の構築方法は以下のとおりである。

1：東側調査地区中央部の地山を削平し、溝S D02、土坑S K02、土坑S K04を構築する。

2：東側調査地区中央部に盛土を行い整地する。

3：整地面に柵址S A01、溝S D03、土坑S K01を構築する。

平坦面S X01やそれらに付属する柵址S A01、溝S D03の廃絶時期はS D03の埋土出土の遺物から16世紀中頃である。

凹地S X02について

凹地S X02は鍋の羽口・炉壠・鉄滓などの生産関連の遺物が出土しており、また遺構内に焼土や硬化面があることから、周辺に建物を建築するときの製鉄・鍛冶・銅鋳などを行う、牛座が小規模あるいは短期間に使われた工房址であった可能性が高い。古代の遺物がS X02周辺に分布しているが（第8図）、S X02から多量に出土した土器が平坦面S X01の下層にあたる凹地S X04から出土した土器と同型であるため、時期はS X01を造成中に築いたものと推定できる。S X02は平坦面S X01や平坦面上に建築されたであろう建築物を構築するときに必要な鉄製品あるいは銅製品を铸造するために築かれたものであろう。

2. 遺物

出土遺物の時期について

遺物の時期は大きく次の5つの時期に分かれる。①古墳時代の須恵器、②9～11世紀代の十師器・須恵器の杯・碗・皿群、③15世紀代の上器・陶磁器群、④16世紀中頃の土師器皿群、⑤近世陶磁器である。

古墳時代の須恵器については、周辺遺跡周辺の尾根上には四十九古墳群や安房山古墳群があり、こういった古墳から流れ込んだものと推定できる。近世陶磁器はS X01が廃絶した後のものである。

これから最も多く遺物が出土した、9～16世紀までの遺物について考えてみたい。

遺物の出土状況

第8・9図は出土した土器の目録部破片数から時代ごとの散布状況を示したものである。区切り幅は5mである。第8図は古代の遺物（9世紀～12世紀）、第9図は中世の遺物（13世紀～16世紀）である。古代の遺物は平坦面S X01より東側でまとまって出土し、反対に15世紀を中心とする中世の遺物はS X01を中心として散在している。このことから、15世紀代に古代の遺構を撤去してから平坦面S X01を構築したと推定できる。

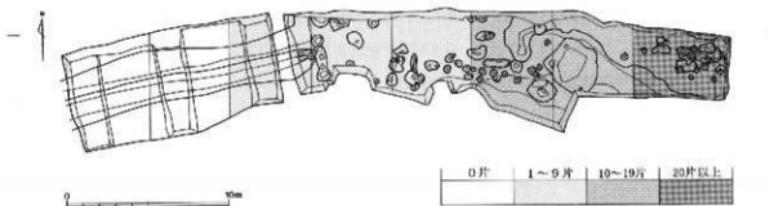
土器・陶磁器の構成比

第10～13図、第3～6表は時代別に見た土器・陶磁器の種類・用途別の構成比率である。計量方法は口縁部計測法を用いた。口縁部計測法による計量方法は宇野隆夫氏による論考が詳しい（宇野1981、1992）。

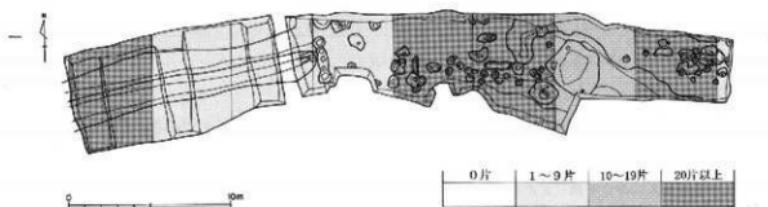
第10図・第3表は古代遺物の種類別構成比率である。土師器84.3%、黒色土器13.3%、須恵器2.4%を占める。第11図・第4表は古代遺物の用途別構成比率である。内訳は、食膳具98.8%、貯蔵具0.3%、煮炊き具0.9%を占める。

第12図・第5表は中世遺物の種類別構成比率である。土師質土器と報告した風炉・香炉などは使用法は瓦質土器の範疇にはいるので瓦質土器として計測した。土師器97.2%、珠洲1.6%、瓦質土器1.0%、瀬戸美濃0.2%を占め、壺器系、青磁は存在するが数値に現れなかった遺物である。第13図・第6表は中世遺物の用途別構成比率である。内訳は、食膳具97.2%、調理具1.4%、調度品1.2%、貯蔵具0.2%を占める。

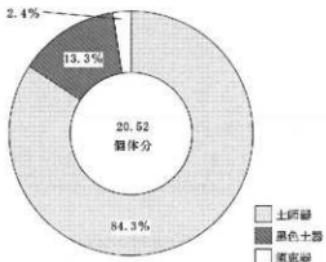
中世において格上の遺跡になるほど土器食膳具の比率が高く、格下の遺跡になると中国産あるいは日本産の陶磁器の比率が高くなる傾向がある（宇野1997）。土器食膳具の使用方法というものは儀礼・宗教的なものであり、土師器皿が多量に出土した当遺跡は城館や宗教施設といった当時の社会に対して重要な位置にいたことが推察できる。遺構の立地や出土遺物として土師器・瓦質土器が目立つ点、および地元に残る伝承から推察すると、当遺跡が寺院跡である可能性が非常に高い。



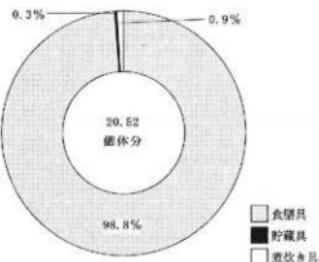
第8図 古代遺物の出土散布図（1／300）



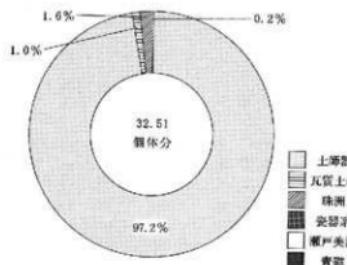
第9図 中世遺物の出土散布図（1／300）



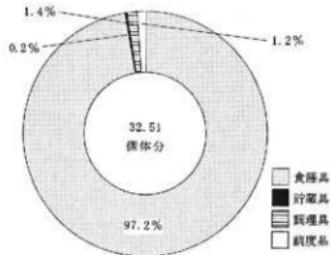
第10図 古代土器・陶磁器の種類別構成比率



第11図 古代土器・陶磁器の用途別構成比率



第12図 中世土器・陶磁器の種類別構成比率



第13図 中世土器・陶磁器の用途別構成比率

3. おわりに

問尽遺跡の時期別の遺物構成を再掲してみると、①古墳時代の須恵器、②9～12世紀代の土師器・須恵器、③15世紀代の土器・陶磁器、④16世紀代の土器群、⑤近世陶磁器に分かれる。遺物の構成などから寺院の可能性が非常に高いことを指摘した。『越中志微』によると手洗野村は真言宗である二上山養老寺との繋がりがあり、このことから当遺跡は山岳宗教寺院跡の可能性がある。

富山県では山岳宗教遺跡として氷見市石動山、福光町医王山、立山町芦峅寺室堂遺跡で発掘調査が行われている。これらの時期はおおよそ5つに分かれる。

I期；8世紀後半～9世紀。日本各地の平野部に国分寺が造営され、修行を行う場所として山中に道場が築かれる時期。

II期；9世紀末～12世紀初め。山岳に本堂を含む本格的な伽藍が整備される時期。

III期；12世紀中頃～14世紀初め。山岳宗教が社会的勢力になり、最盛期を迎える時期。

種類	器種	破片数	個体数
上師器	椀	220	11.66 (67.4%)
	皿	79	5.45 (31.5%)
	蓋	5	0.18 (1.1%)
小計		304	17.29 [84.3%]
黑色土器	椀	52	2.73 [13.3%]
須恵器	杯	6	0.44 (88.0%)
	甌	2	0.06 (12.0%)
小計		8	0.50 [2.4%]
総計		312	20.52 [100.0%]

*印は存在するが、個体数の比率が数値として表れないもの

第3表 古代遺物の種類器種別組成表

種類	器種	破片数	個体数
土師器	皿	230	31.60 [97.2%]
瓦質土器	火鉢	10	0.19 (57.6%)
	青 灰 炉	3	0.14 (42.4%)
小計		13	0.33 [1.0%]
珠洲	擂鉢	7	0.44 (84.6%)
	甌	3	0.08 (15.4%)
小計		10	0.52 [1.6%]
甌器系	擂鉢	1	* (* %)
	壺・甌	1	* (* %)
小計		2	* (* %)
瀬戸美濃	合子	1	* (* %)
	香炉	3	0.06 (100.0%)
小計		4	0.06 [0.2%]
青磁	椀	2	* (* %)
総計		261	32.51 [100.0%]

*印は存在するが、個体数の比率が数値として表れないもの

第5表 中世遺物の種類器種別組成表

用途	種類	破片数	個体数
食膳具	土師器	351	19.84 (97.8%)
	須恵器	6	0.44 (2.2%)
小計		357	20.28 [98.8%]
貯藏具	須恵器	2	0.06 [0.3%]
炊炊き具	土師器	5	0.18 [0.9%]
総計		312	20.52 [100.0%]

*印は存在するが、個体数の比率が数値として表れないもの

第4表 古代遺物の用途種類別組成表

用途	種類	破片数	個体数
食膳具	土師器	230	31.60 (100.0%)
	青磁	2	* (* %)
小計		232	31.60 [97.2%]
貯藏具	珠洲	3	0.08 (100.0%)
	瓷器系	1	* (* %)
小計		4	0.08 (0.2%)
調理具	珠洲	7	0.44 (100.0%)
	瓷器系	1	* (* %)
小計		8	0.44 [1.4%]
調度品	瓦質土器	13	0.33 (84.6%)
	瀬戸美濃	4	0.06 (15.4%)
小計		17	0.39 [1.2%]
総計		261	32.51 [100.0%]

*印は存在するが、個体数の比率が数値として表れないもの

第6表 中世遺物の用途種類別組成表

Ⅳ期：14世紀中頃～15世紀。山岳宗教の勢力が後退する時期。医王山ショウゴン寺では土壘を構える。

Ⅴ期：16世紀以降。山岳宗教が衰退する時期。立山では立山信仰が飛躍的に発展していく時期。

こうした動きに当遺跡もおおよそ符合しており、当調査地区は山岳宗教系寺院の境内地で凸字状の平坦面S X01の山裾奥に御堂があった可能性がある。

しかしながら、当遺跡で最も多くの遺物が出上したのはⅣ期にあたり、山岳宗教が最盛期を迎えるⅢ期の遺物の量は少ない。ただし、14世紀初めに吉田宗園上山信光寺が手洗野村に造営されていることと、15世紀後半に信光寺が堂塔の修造を行っていることは非常に興味深い。

当遺跡周辺には中世の城跡・寺院・集落遺跡があり、これらの解明とともに当遺跡の位置づけを行わなければならないであろう。

参考文献

- 宇野 章 1974 「高岡市頭川『遺跡』『大塙』第5号」 富山考古学会
- 宇野 隆夫 1981 「遺物の考察」『白河北嶺北辺の調査・京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅲ 京都大学埋蔵文化財センター
- 宇野 隆夫 1986 「越中弓止城跡の土師器－中世の北陸と畿内－」『大塙』第10号 富山考古学会
- 宇野 隆夫 1992 「食器計畫の意義と方法」『國立歴史民俗博物館研究報告』第40集 第一法規出版
- 宇野 隆夫 1994 「鎌倉社会の考古学的研究－北陸を舞台として」 桂書房
- 宇野隆夫他 1994 「芦原寺堂室跡－立山信仰の考古学的研究－」 立山町教育委員会
- 宇野隆夫他 1995 「舟谷県十三塗遺跡・福島城跡の研究」『國立歴史民俗博物館研究報告』第71集 第一法規出版
- 宇野 隆夫 1997 「中世食器様式の意味するもの－計畫分析による使用法の復元－」『國立歴史民俗博物館研究報告』第71集 第一法規出版
- 大門又緒他 1985 「富山県高岡市西山丘陵部文化財分布調査報告」 富山市教育委員会
- 岡本淳一郎 1999 「能越自動車道付近埋蔵文化財発掘地調査報告－N E J -10・N E J -11・富山県文化振興財團埋蔵文化財発掘調査報告」第10集 財団法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所
- 京出良志他 (弘源寺跡総合調査団) 1994 「越中二上山と圓泰寺」 桂書房
- 久保尚文化 1984 「文政交流と社会」『富山県史－通史編Ⅱ中世』 富山県
- 坂井誠一郎 1979 「角川日本地名大辞典16－富山県」 角川書店
- 柳原 浩高 1996 「十三塗遺跡－市浦村第1次・第2次発掘調査概要・市浦村埋蔵文化財調査報告書」第8集 市浦村教育委員会
- 橋原滋吉他 1998 「十二塗遺跡－市浦村第77次発掘調査報告書・市浦村埋蔵文化財調査報告書」第9集 市浦村教育委員会
- 高瀬重雄他 1994 「日本歴史地名大系16－富山県の地名」 平凡社
- 西井 鶴儀 1987 「頭川閣跡遺跡」『北塙の古代寺院－その源流と古瓦』 桂書房
- 浜岡資太郎他 1987 「西川島一能登における山世村落の聚落調査」 穴水町教育委員会
- 藤沢 良祐 1982 「吉瀬戸中町様式の成立過程」『東洋陶磁』VOL. 8 東洋陶磁会
- 藤沢 良祐 1991 「瀬戸古窯址群Ⅱ～古窯～後期様式の発展～」『研究紀要』X 潤戸市歴史民俗資料館
- 藤沢 良祐 1995 「瀬戸古窯址群Ⅲ～古瀬戸前期様式の発展～」『研究紀要』第3集 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
- 古岡英明他 1991 「たかおか－歴史との出会い－」 高岡市
- 松村実吉他 1993 「美玉は語る－医王山文化調査報告書」 福光町・医王山文化調査委員会
- 渡 順他 1984 「富山県石動山信仰遺跡遺物調査報告書」 水見市教育委員会
- 渡 順他 1989 「開拓史跡石動山文化財調査報告書－八代仙谷ダム計画開発－」 石動山文化財調査会・水見市教育委員会
- 吉田道一他 1994 「中世北陸の寺院と墓地」 北陸中古土器研究会
- 森山 博圓 1951 「越中志穀」 富山新聞社
- 山本正敏他 1996 「梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告・富山県文化振興財團埋蔵文化財発掘調査報告」第7集 財団法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所
- 吉岡 康暢 1994 「中世須恵器の研究」 当川弘文館
- 和田 一郎 1959 「高岡市史」上巻 吉林書院新社

調査参加者名簿

発掘

上田工、大田欣和、大林美由紀、河原康弘、京口直子、小島善雄、小林央、佐野賀、沢出和明、新谷晴紀子

齊木知子、寺井久子、寺島利春、中山賢富、南部昭一、辻田勝江、花尾清治、浜山智花外、庄沢隆太郎

古岡弘之、放生千恵、前田武蔵、山崎一男、山城一夫

整理

井田まさみ、上田晶子、小川由紀、桶谷潤、小田紀子、金田あゆみ、鎌仲勝了、河島宏美、小林央、新谷晴紀子

高井久美、高木麻里、高田えみ子、竹枝弥香、竹本朝二、田辺節代、寺井久子、道谷美奈子、中川叶子

仁木宗徳耕、猪瀬、原島穂、水見智子、松原美樹、三島幸代、水島優美子、宮崎沙綾、明前雅江、室崎真弓

山崎千鶴子、横田静代

事務

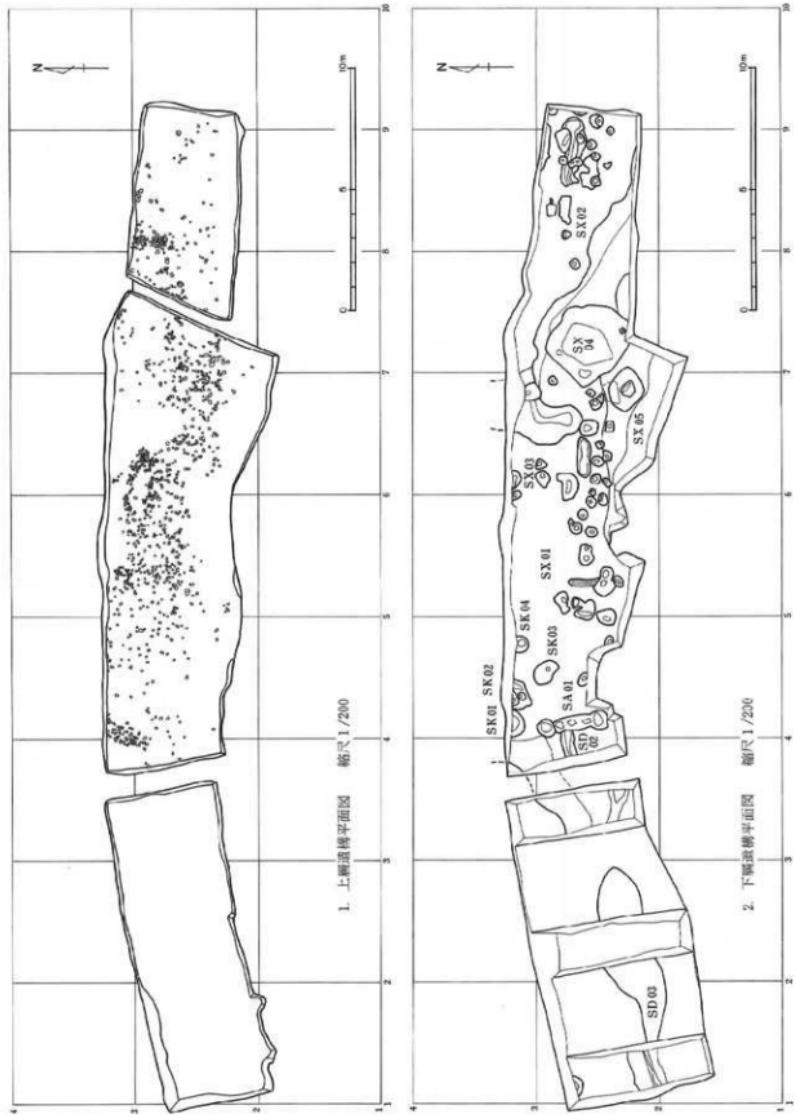
片岡千賀子

報告書抄録

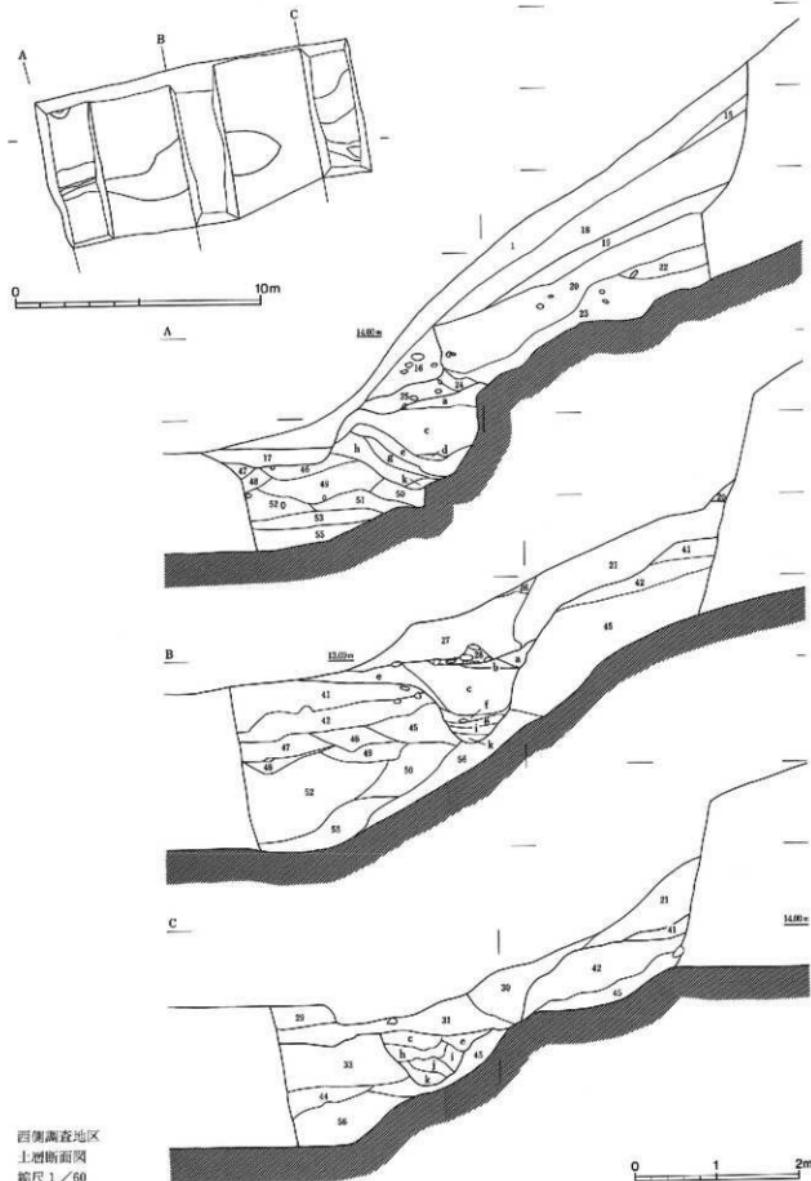
ふりがな	まくいせきうちうねりく						
書名	周辺遺跡調査報告						
調書名	平成10年度、手洗野（2）地区急傾斜地崩壊対策事業に伴う調査						
卷次							
シリーズ名	高岡市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第5冊						
編著者名	荒井隆、岡田一広、山口辰一						
編集機関	高岡市教育委員会						
所在地	〒933-0057 富山県高岡市広小路7番50号						
発行年月日	西暦 2000年3月31日						
ふりがな 所収遺跡	所在地	コ ド 北緯 東經		調査期間	調査面積	調査原因	
周辺遺跡	市町村 遺跡番号	36° 45' 33"	136° 58' 2"	980402 7 980710	199m ²	急傾斜地崩壊対策工事	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
周辺遺跡	集落跡	平安時代後期 室町時代	幅址1基、二坑4基 溝2条、平坦面1面	土師器、須恵器、珠洲 青磁、近世陶磁器、 土鏡、鏡の羽口、 鉄釘、銅錢			

図面・図版

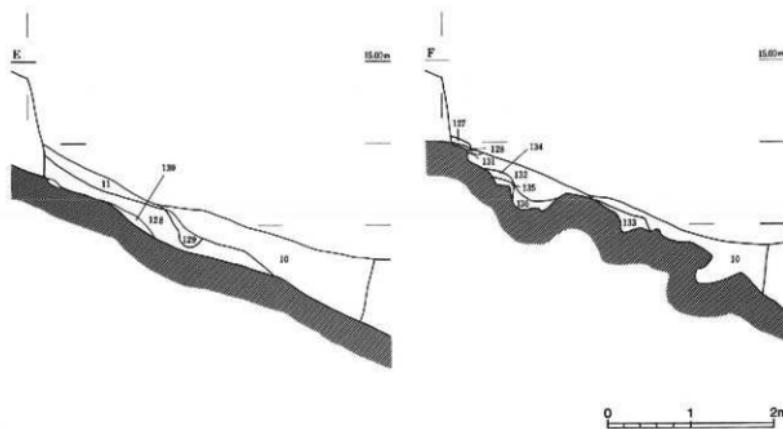
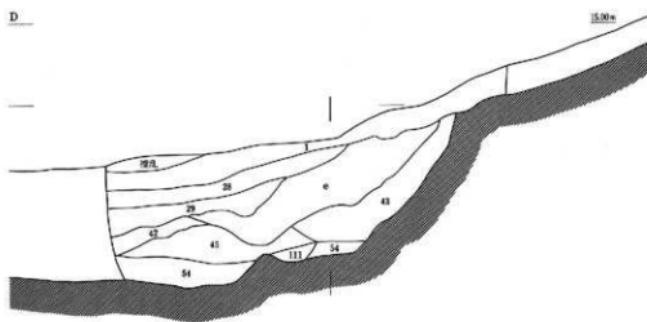
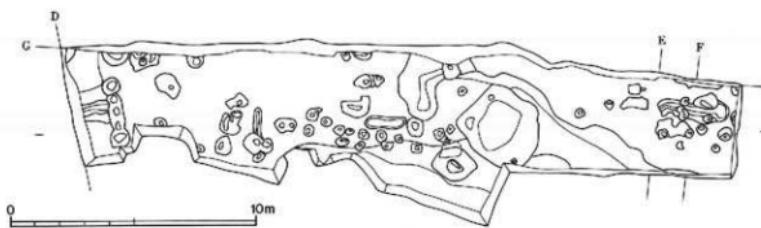
図面一 遺構実測図



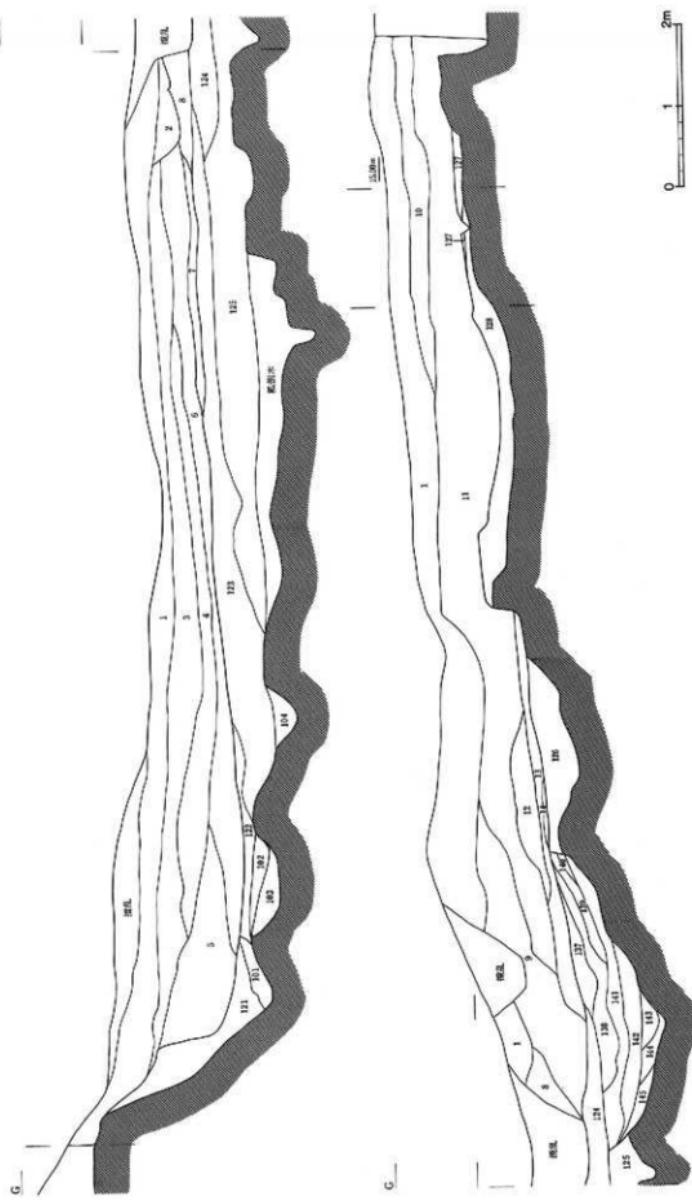
図面一
遺構実測図



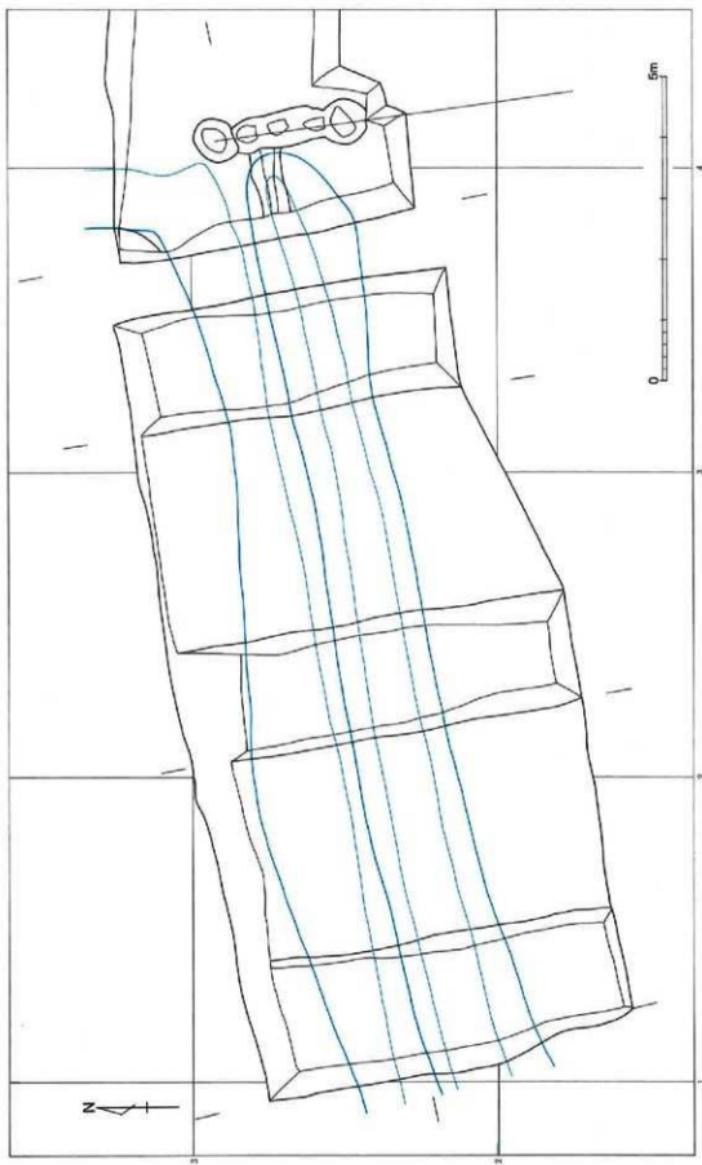
図面三 造構実測図



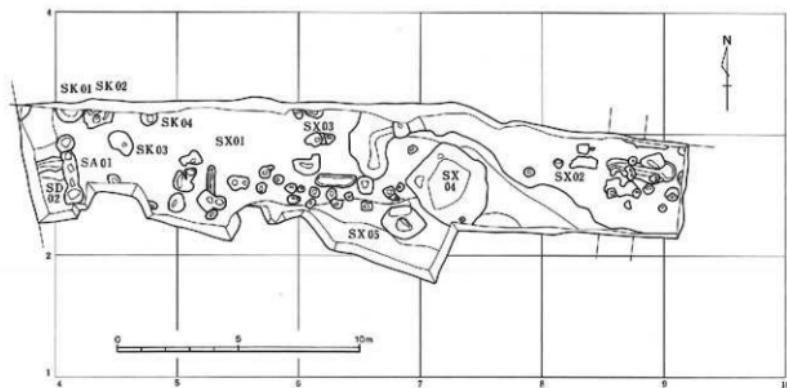
四面遺構実測図



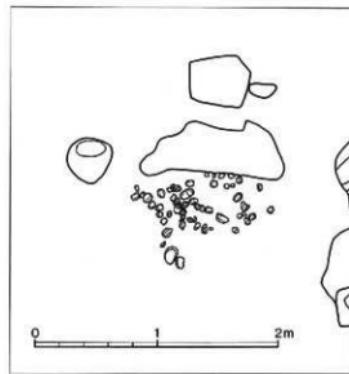
上圖圖 道橋実測圖



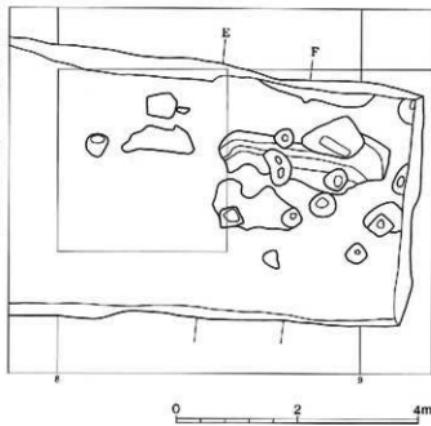
諸 S D13版元圖 比尺 1/80



1. 中央調査地区遺構図 比尺 1/200



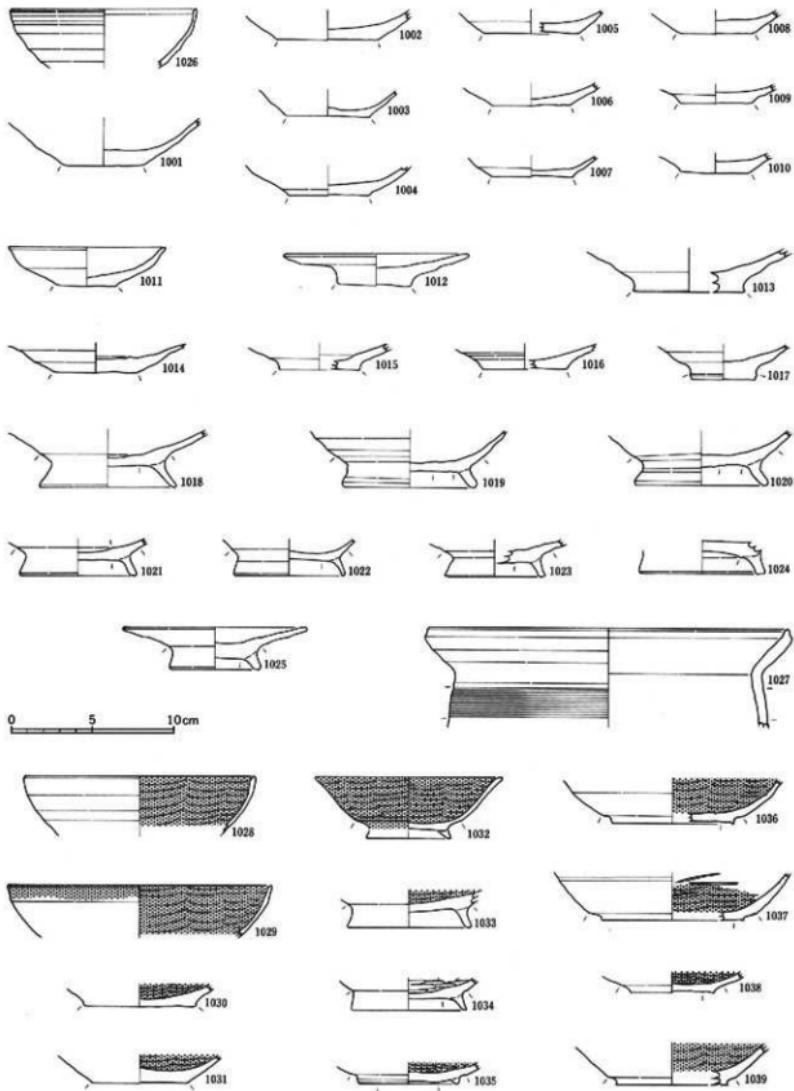
2. 土縫出土状態図 比尺 1/40



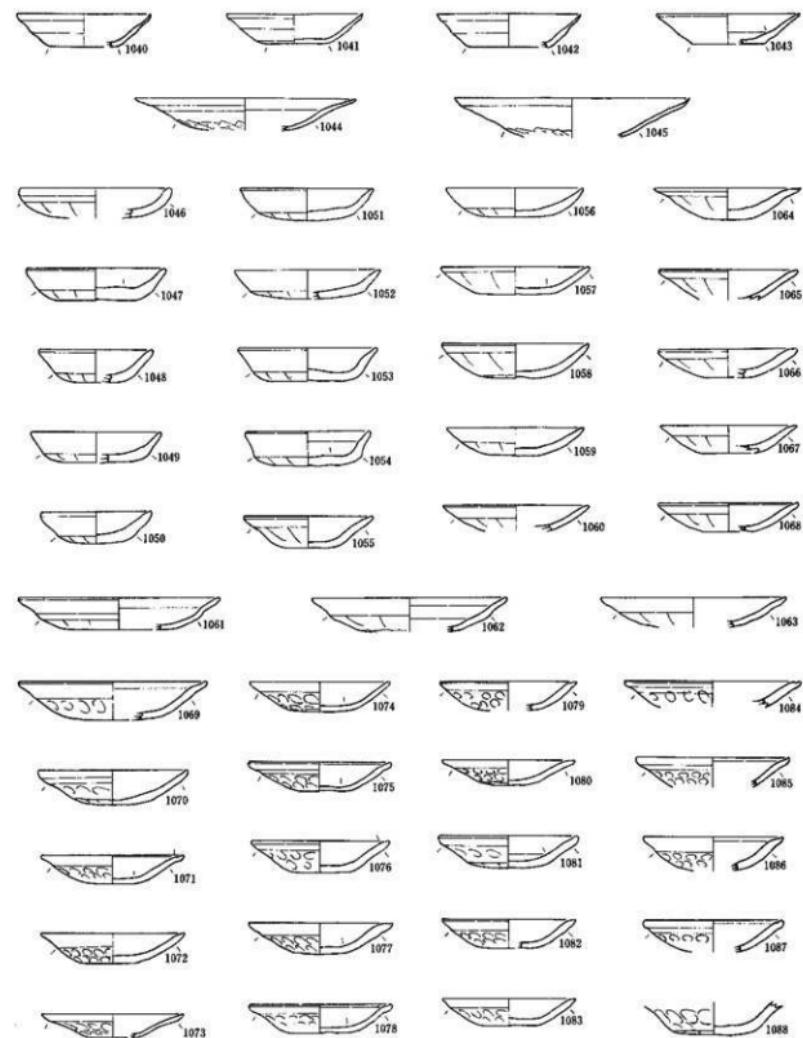
3. 四地 SX02実測図 比尺 1/80

図面七

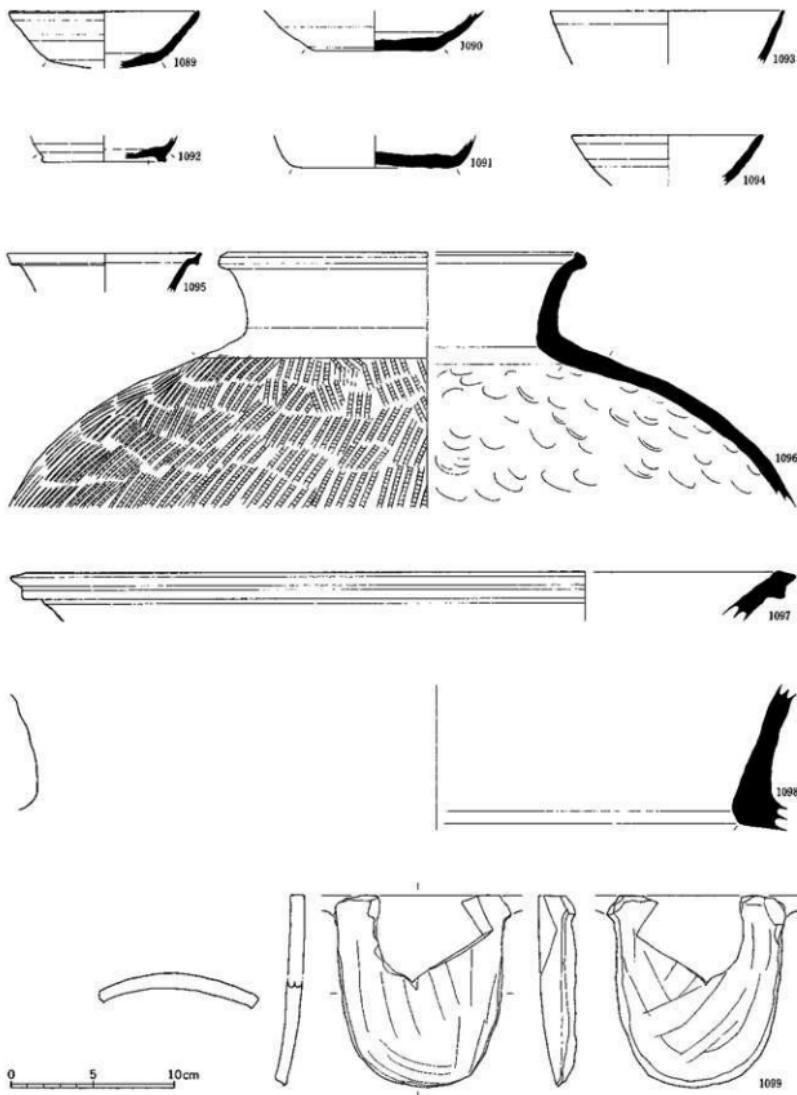
遺物実測図



圖面八 遺物実測図

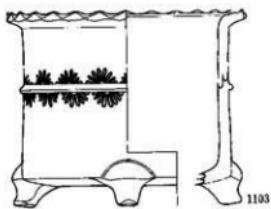
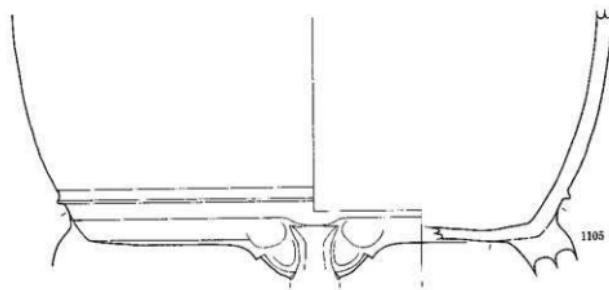
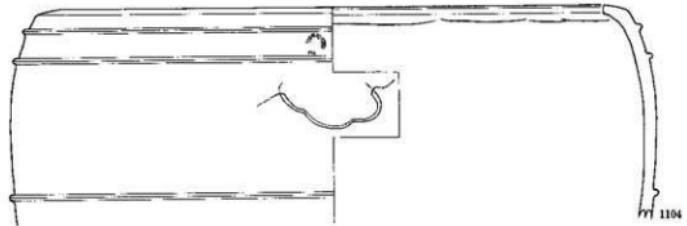


0 5 10cm



上櫻塚=須恵器：1089～1098、瓦質土器：1099

縮尺1／3

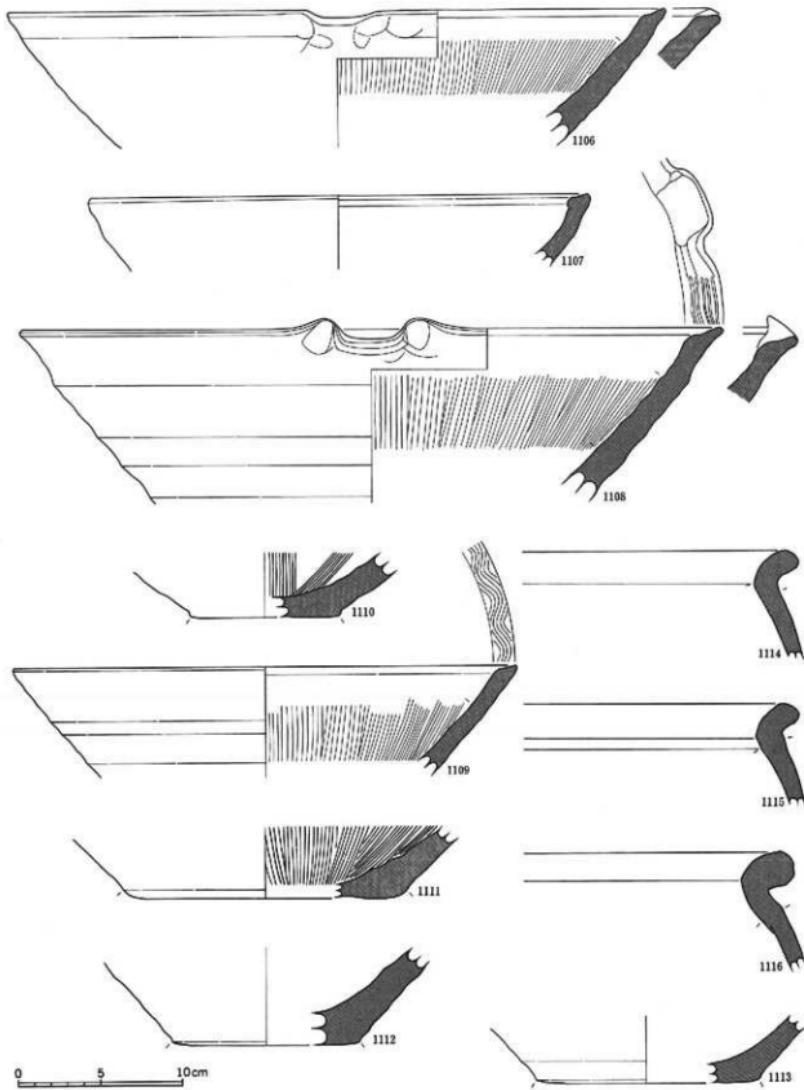


0 5 10cm

土器類=瓦質土器；1100、土師質土器；1101～1105

縮尺1／3

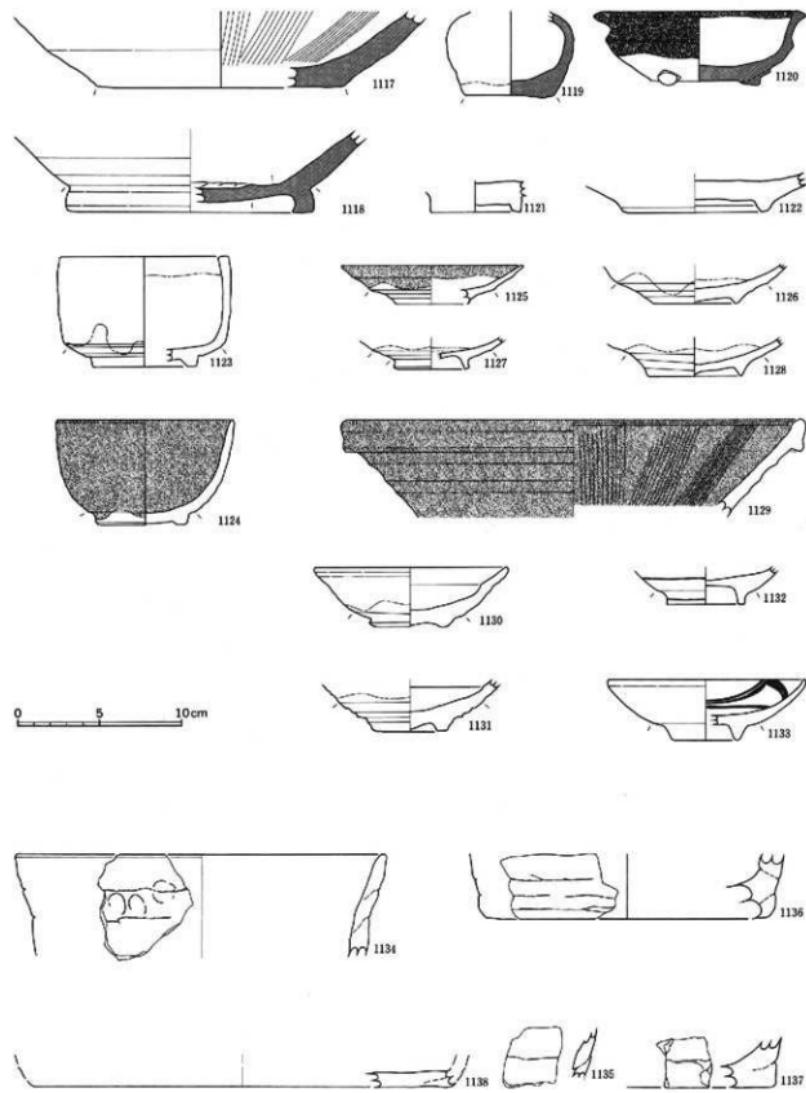
図面一
遺物実測図



土器類=株洲

縮尺1/3

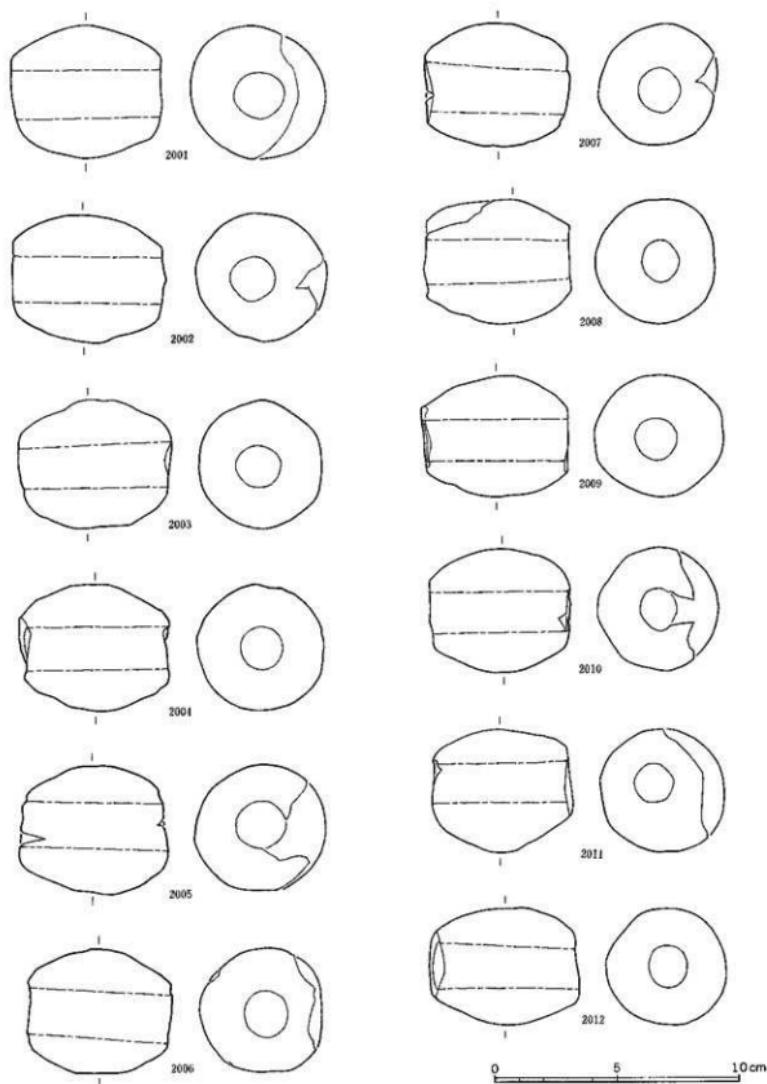
圖面一二
遺物実測図



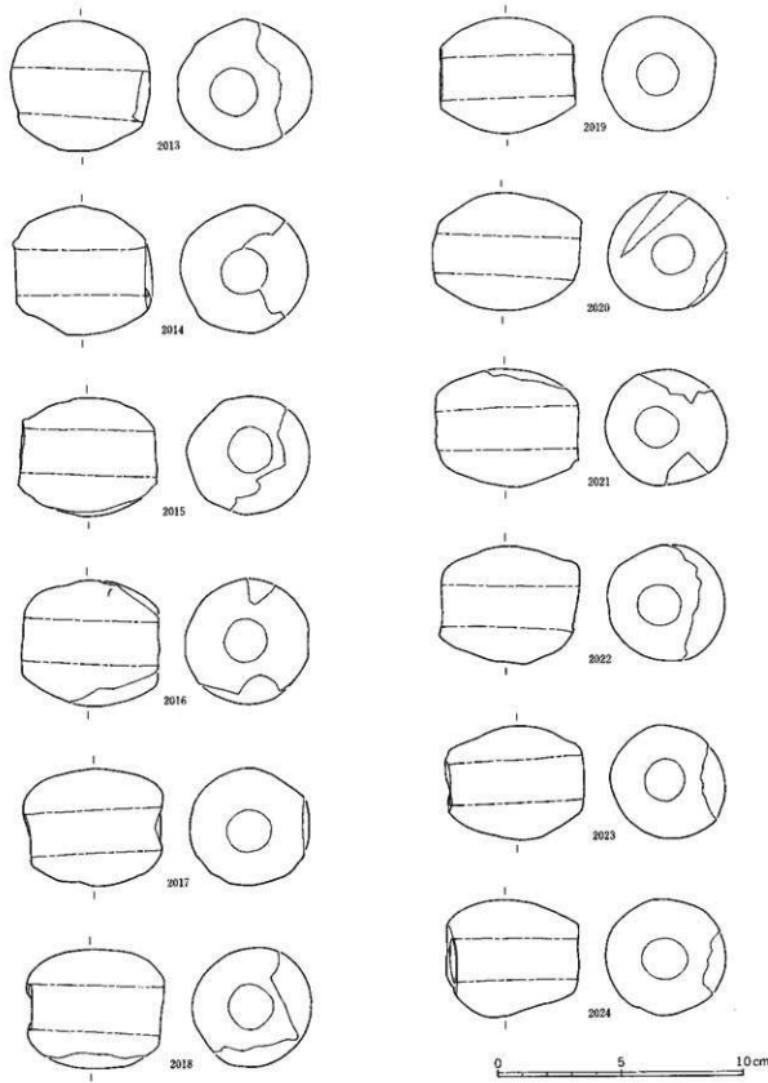
土器類=中世壺瓶系陶器；1117・1118、中世陶磁器；瀬戸美濃1119・1120、青磁1121・1122
近世陶磁器；越中高岡1123～1129、紀伊1130～1133、製塙上層；1134～1138

縮尺1/3

図三 遺物実測図



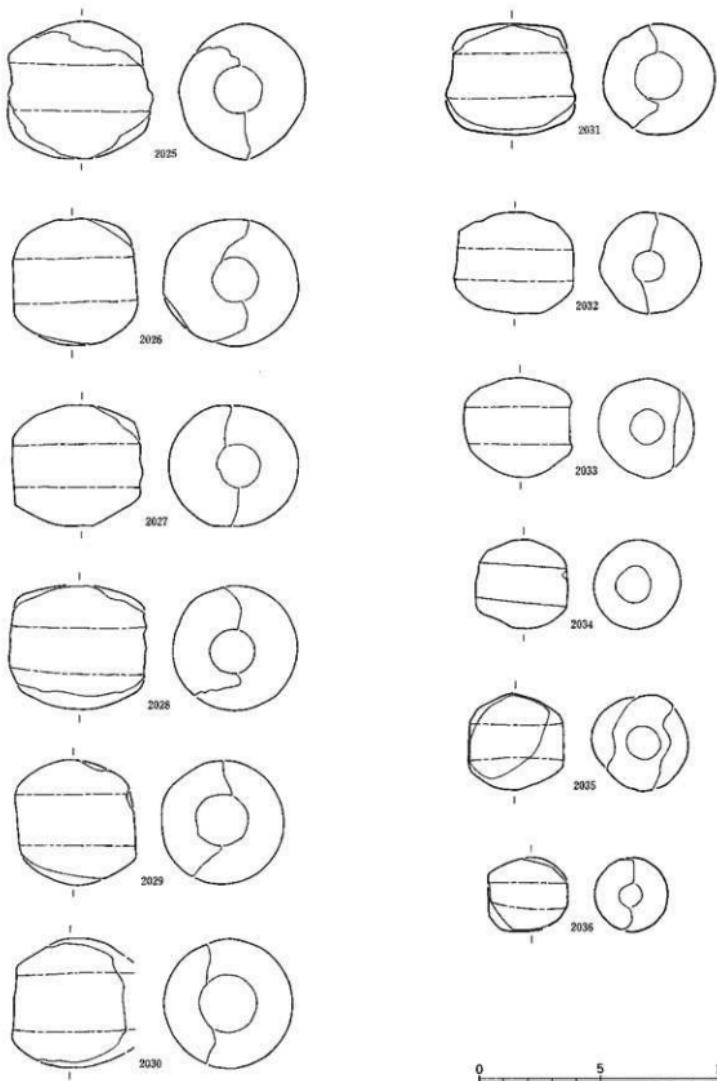
図面一四 遺物実測図

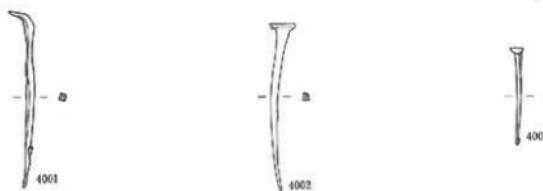
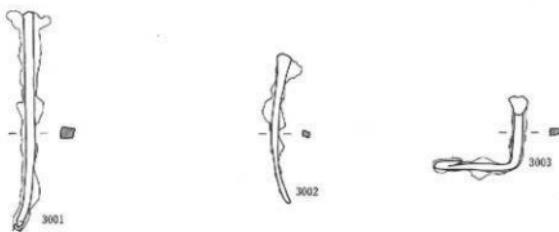
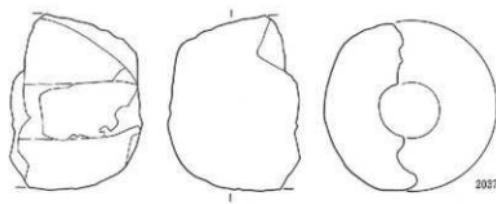


十厘米=上縫

縮尺1/2

図面一五 遺物実測図





0 5 10 cm



1. 遠景(東)



2. 遠景(東)



1. 調査地区全景（東）



2. 調査地区全景（東）



1. 調査地区全景（東）



2. 調査地区全景（西）



1. 西側調查地區全景（南）



2. 西側調查地區全景（南東）



1. 門地 S X02 (上方)



2. 門地 S X02 (北)



1. 横址 S A01 全景 (南)



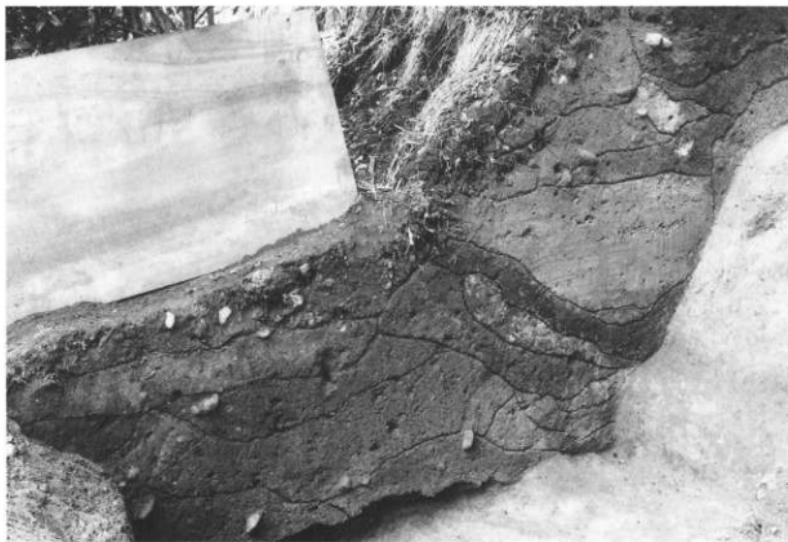
2. 平坦面 S X01 全景 (西)



1. 平坦面 S X01斷面（南東）



2. 四地 S X02斷面（西）



1. 潟 S D03斷面（東）



2. 潟 S D03斷面（東）



1. 溝 S D03斷面（東）



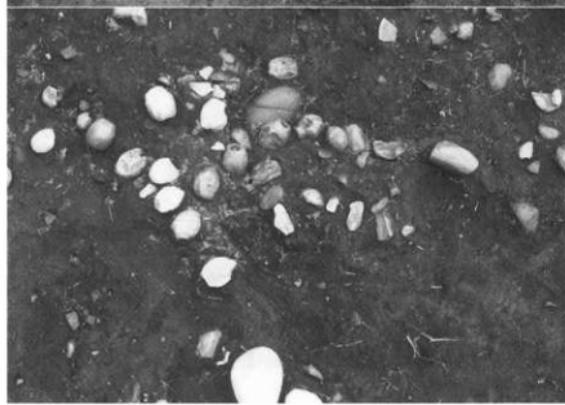
2. 溝 S D03斷面（東）



1. 平坦面 S X01遺物出土
狀態、土鉢器皿
(南)



2. 平坦面 S X01遺物出土
狀態、土鉢器皿
(南)



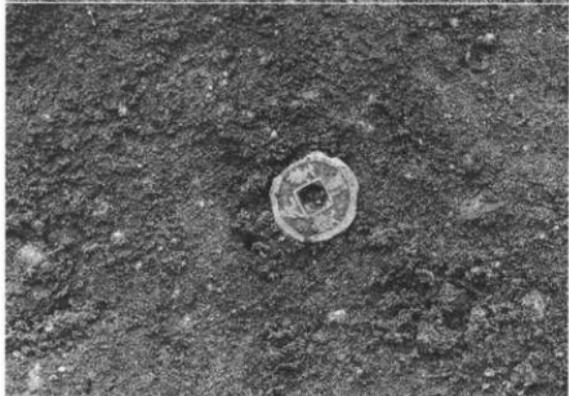
3. 凹地 S X02遺物出土
狀態、土無 (南西)



1. 平坦面 S X01遺物出土狀態、鉄釘（南）



2. 平坦面 S X01遺物出土狀態、鉄釘・鋼釘（南）



3. 四地 S X04遺物出土
狀態、銅錢（西）



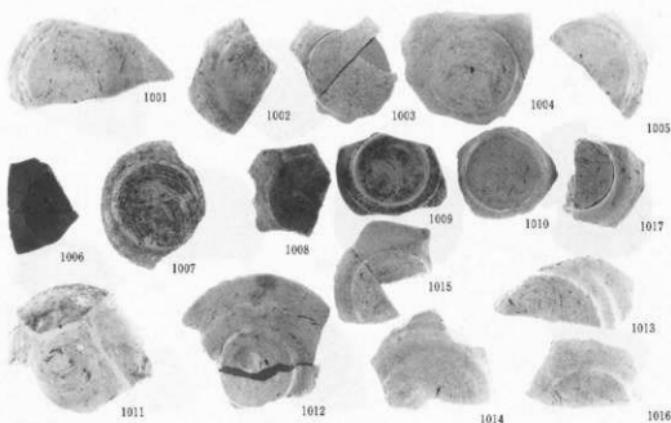
1. 調查風景（西）



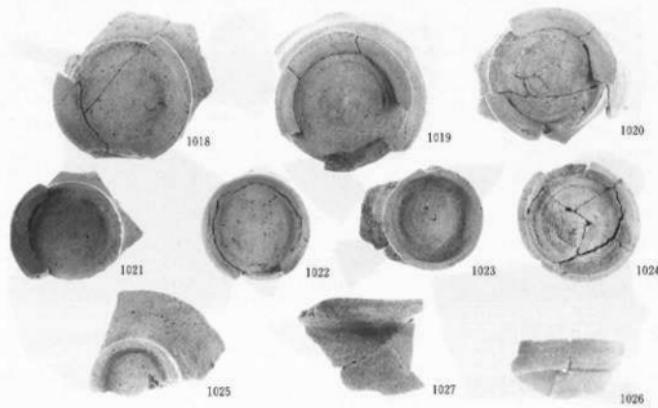
2. 調査風景（南西）



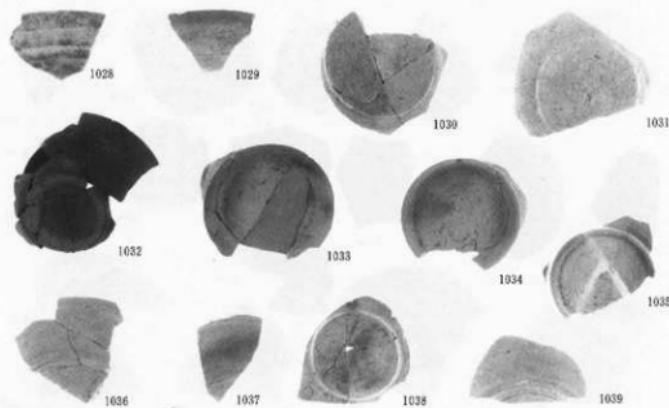
3. 調査風景（北）



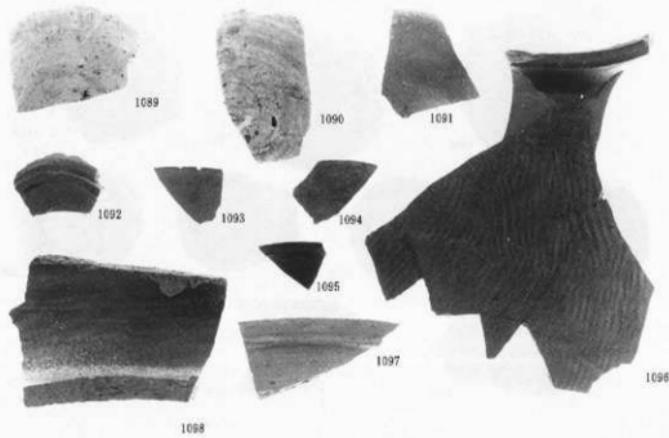
1. 土師器（古代）



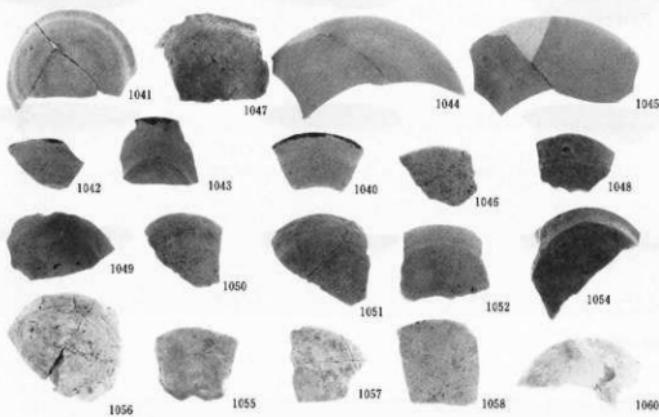
2. 土師器（古代）



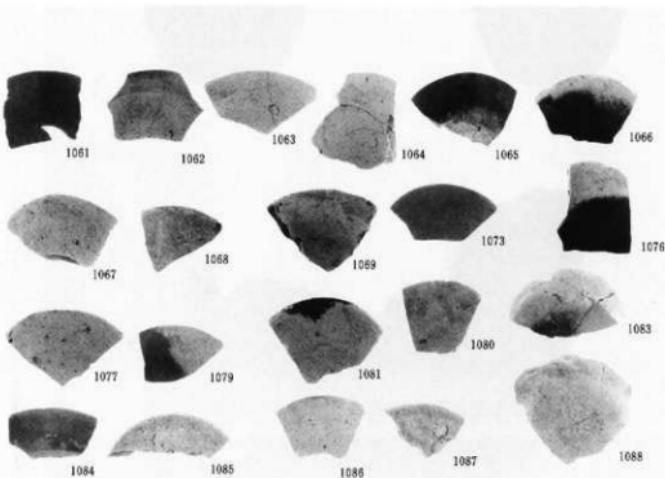
1. 土師器（古代）



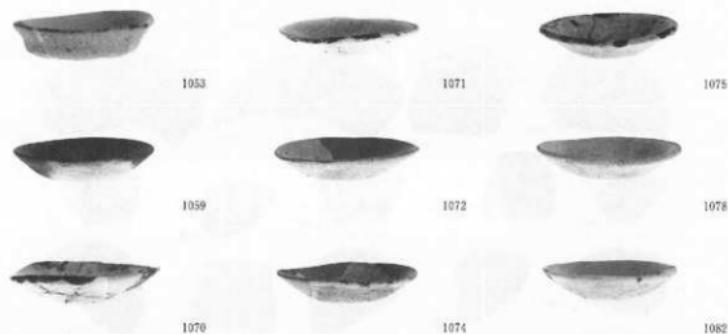
2. 須恵器



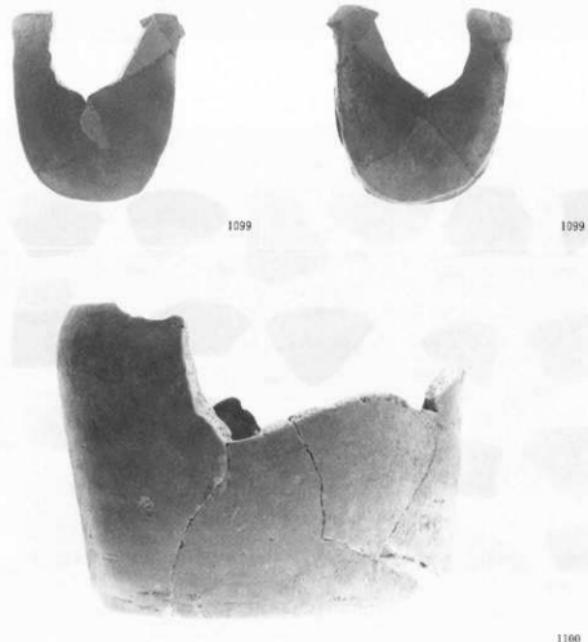
1. 土師器（中世）



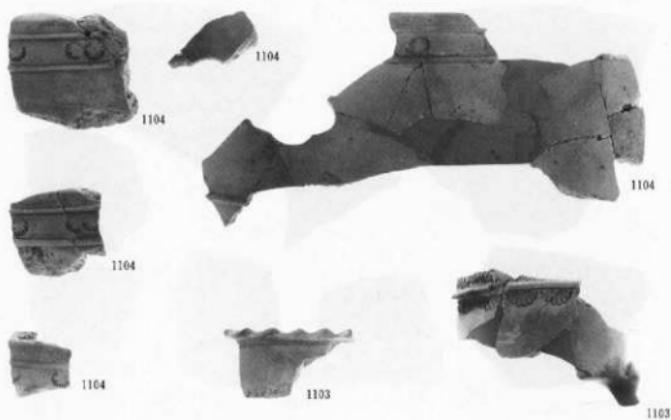
2. 土師器（中世）



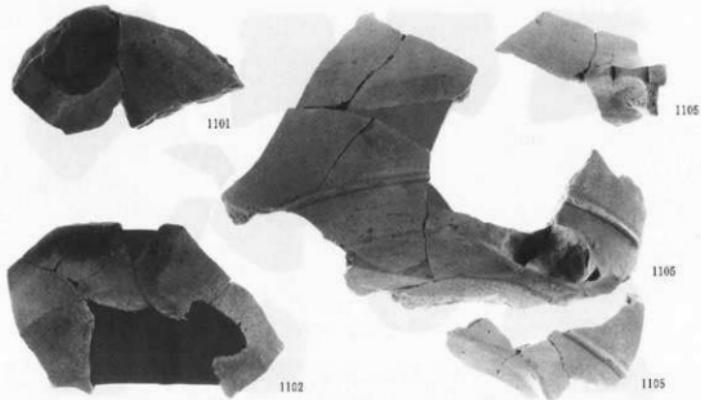
1. 土器（中世）



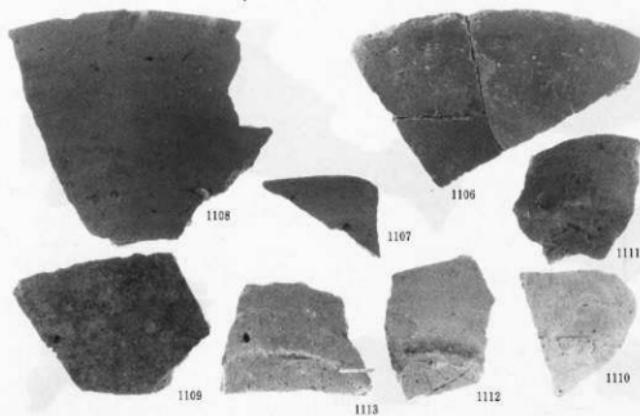
2. 瓦質土器



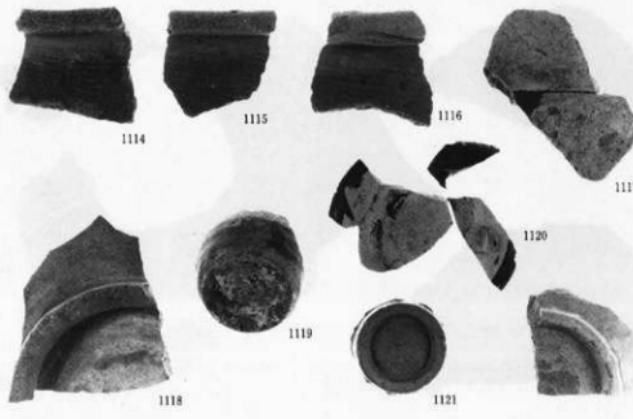
1. 土師質土器



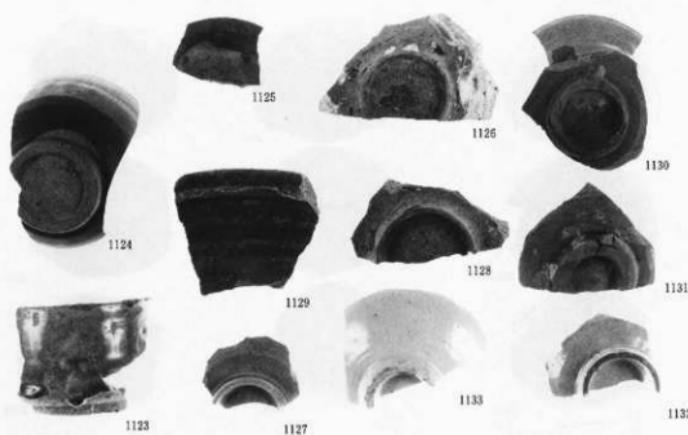
2. 土師質土器



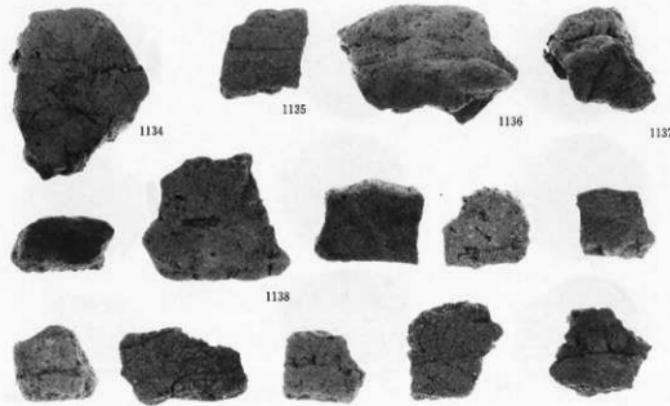
1. 珠陶



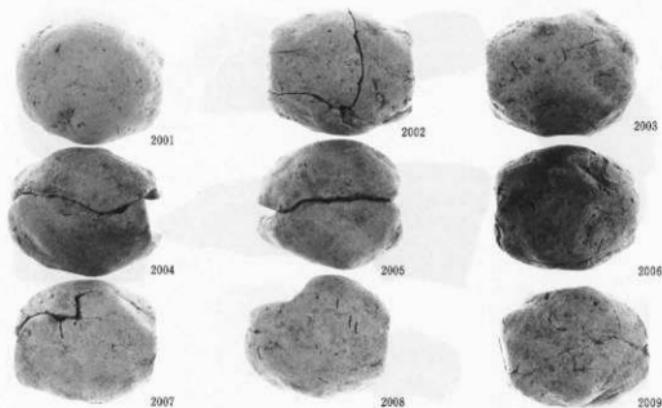
2. 珠陶・中世瓷器系陶器・中世陶磁器



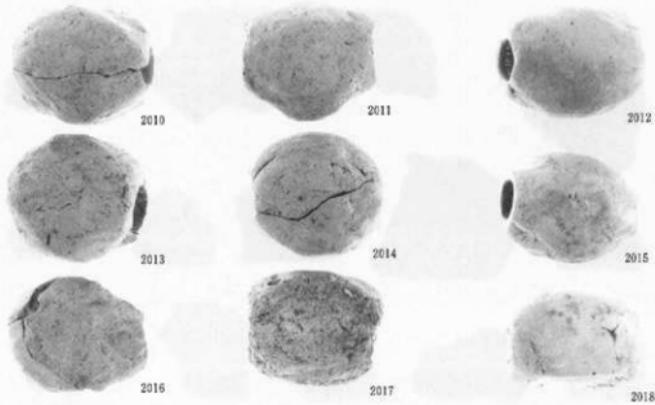
1. 新石陶器



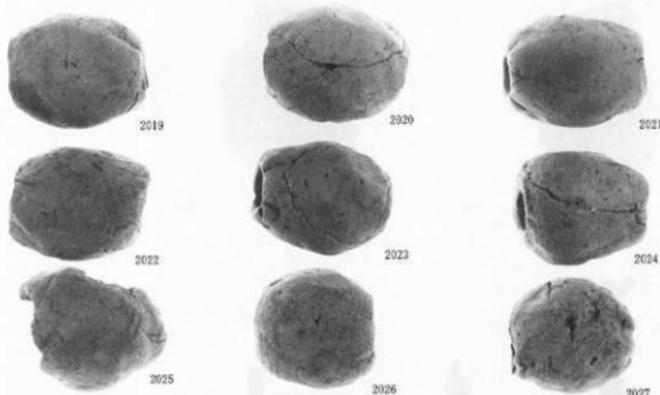
2. 制塙土器



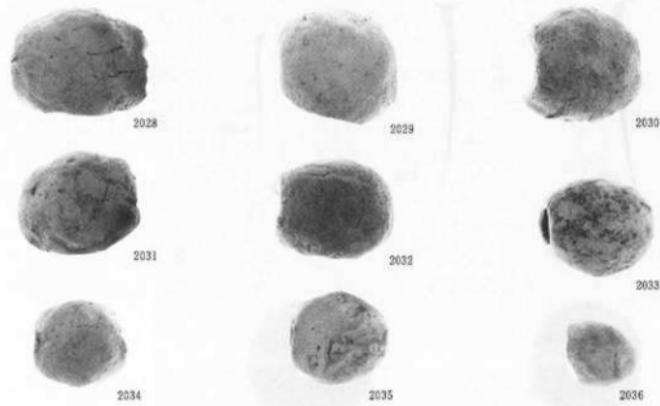
1. 土鍬



2. 土鍬



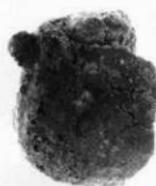
1. 土錘



2. 土錘



2037



2037

1. 蘭の羽口



3001



3002



3003

2. 鉄釘



4001



4002



4003

3. 銅釘



4004



4005

4. 銅錢

高岡市埋蔵文化財調査報告第5冊
間尽遺跡調査報告

発行者 高岡市教育委員会
富山県高岡市広小路7番50号

印刷所 キクラ印刷株式会社
富山県高岡市幡野48-2

2000年3月31日